

大学礼拝
説教集

第 23 号



2019

東北学院大学

大学礼拝

説教集

第 23 号

2019

東北学院大学

目次

巻頭言

一緒に歩いてくださるイエス

「謙遜」と「謙虚」

誰も思い巡らすことがなかった苦しみ

遥か遠い昔からのまなざし

言葉は光となって命を照らす

あなたはどこに立っているか

「主の祈り」のすばらしさ

善良な正しい人、ヨセフ

主イエスに全てを委ね、従う歩みをする

人は「知らない」を知らない

ちいさなごに花を入れ

救い主がお生まれになった

神の似像

宗 教 部 長	野 村 信	4
理 事 長 ・ 学 長	松 本 宣 郎	6
院 長	佐 々 木 哲 夫	12
日 本 基 督 教 団	望 月 修	16
仙 台 広 瀬 河 畔 教 会	瀨 谷 寛	23
日 本 基 督 教 団	中 本 純	28
仙 台 東 一 番 丁 教 会	荒 井 偉 作	34
日 本 基 督 教 団	平 賀 真 理 子	40
名 取 基 督 教 会	仙 台 南 伝 道 教 会	45
日 本 基 督 教 団	東 北 学 院 中 学 校	51
仙 台 南 伝 道 教 会	東 北 学 院 中 学 校 主 任	55
宗 教 部 長	東 北 学 院 榴 木 高 等 学 校 主 任	60
宗 教 部 長	野 村 信	66
宗 教 部 長	阿 久 戸 義 愛	72
宗 教 部 長	川 島 堅 二	72
宗 教 部 長	北 博	72

心の鍵の使い方

「神の愛」ってこんなにマジヤバイ！

神を結び目とすることへの招き

心を欺く

人を汚すもの

信仰より愛

思い悩むな

旅人をもてなす

救われた者たちの祝宴

人生を変える秘訣

ろうあ者の父 高橋 潔

【音楽礼拝】ある日の音楽礼拝

音楽礼拝 二〇一八(平成三十)年十一月十四日(木)

【英語礼拝】Asking

編集後記

大学宗教主任	木村純二	78
大学宗教主任	原田浩司	83
大学宗教主任	藤原佐和子	89
大学宗教主任	吉田新	95
総合人文学科長	出村みや子	101
文学部教授	鐸木道剛	107
経営学部教授	松村尚彦	113
法学部教授	横田尚昌	119
工学部准教授	長島慎二	124
教養学部准教授	大澤史伸	128
東北大学 史資料センター	日野哲	134
大学オルガニスト	今井奈緒子	141
宗教学研究 所 特任准教授	中川郁太郎	148
大学名誉教授	マーチ・デイビッド	154
大学宗教主任	阿久戸義愛	155

巻頭言 「三つの学び … 自然と人間と神」

宗教部長 野村 信

新入生の皆さん、在学生の皆さん、春のすがすがしい光の中であって、それぞれの新しい出発が祝された歩みとなりますようにお祈りいたします。

万物は、厳しい寒さに耐え、暖かい春の日差しの中で、夏に向かって力強く進んでいきます。大自然は実にメリハリのある営みを繰り返しつつ、未来へ生を手渡していきます。

こうしてみると、現代の私たちは、科学技術を発展させ、明るく暖かい環境を作り、一年中居心地の良い空間に身をおくので、いつの間にか季節感が薄れ、自然と共生することも忘れがちですが、もっと外に出て、大自然に触れ、自然の移り変わりとたくましさに触れることが必要です。

ところで、学生の皆さんは、大学のキャンパスまで足を運ぶことで、キャンパス内とその周辺の鮮やかな自然の移り変わりを目にすることができますが、大学の専門的な学びと共に、様々なタイプの人々と出会い、語らい、人間について学んでください。講義の中で、演習の中で、サークル活動の中で、多様な個性に触れて、自分の人格を豊かに養ってください。大学

は、社会に出ていくための、いわば小社会のようなところです。大学内で、仲間を見つけ、様々な人々と出会い、幅広い知識と教養、人との関わり方を身に着け、人間力をアップしてください。

本学は、自然世界や人間社会の学びに加えて、聖書を学ぶことで、神との関わりを視野に入れます。「神」という言葉を聞くと、すぐに現代人は「神はいるのかいないのか」という問いを思い浮かべますが、押し並べて、人類は「いる」を選択し、人間社会と思想を構築してきました。少なくとも、西洋社会は「いる」を土台にした歴史を築いてきました。

東北学院は、アメリカのドイツ改革派の諸教会と宣教師たちの働きによって礎が築かれ、発展してきましたが、彼らには、聖書の教えに基づき、世界へ向かう熱い志がありました。彼らがモットーとした「Life, Light and Love for the World」はそれを象徴しています。そういう点で、本学のキリスト教学と大学礼拝において、自然社会や人間関係についての学びの中心にある普遍的な価値をよく知って、それが私たちを未来へ押し出す原動力であることを修得してください。

大学に入学された皆さん、さらに進級して学ぶ皆さん、充実した一年を過ごされますように心から願っています。

一緒に歩いてくださるイエス

理事長・学長 松本宣郎

ルカによる福音書 二四章一三〜一六、二八〜三五節

13 ちようどこの日、二人の弟子が、エルサレムから六十スタディオン離れたエマオという村へ向かって歩きながら、¹⁴この一切の出来事について話し合っていた。¹⁵話し合い論じ合っていると、イエス御自身が近づいて来て、一緒に歩き始められた。¹⁶しかし、二人の目は遮られていて、イエスだとは分からなかった。

28 一行は目指す村に近づいたが、イエスはなおも先へ行こうとされる様子だった。
29 二人が、「一緒に泊まりください。そろそろ夕方になりますし、もう日も傾いていますから」と言って、無理に引き止めたので、イエスは共に泊まるため家に入られた。
30 一緒に食事の席に着いたとき、イエスはパンを取り、賛美の祈りを唱え、パンを裂いてお渡しになった。³¹すると、二人の目が開け、イエスだと分かっていたが、その姿は見えなくなつた。³²二人は、「道で話しておられるとき、また聖書を説明してくださつたと

き、わたしたちの心は燃えていたではないか」と語り合つた。33そして、時を移さず出發して、エルサレムに戻つてみると、十一人とその仲間が集まつて、34本主に主は復活して、シモンに現れたと言つていた。35二人も、道で起つたことや、パンを裂いてくださつたときにイエスだと分かつた次第を話した。

古代ユダヤの地方にはじめて生まれたキリスト教徒たちの、不思議にも心躍る体験の物語です。それは二千年の後の世界に生きている私たちにも真実な物語であると思います。

紀元一世紀の三十年頃のユダヤで起つたことです。その頃の時代の数え方で言うと、ローマ帝国皇帝ティベリウスの治世十六年ごろ、といえは通用したでしょう。ナザレのイエスという、宣教師が、神の国につき、人類の罪からの救いにつき、人々の心を揺さぶるような発言をし、多くの庶民を引きつけました。彼は当時の一般ユダヤ人の属していたユダヤ教の教義や指導者に対しても平等に悔い改めを迫りましたから、彼を敵視し、危険視する勢力によって捉えられ、権力者であるローマの総督の法廷に突き出され、死刑に処されました。ところが、イエスをかねて神の子と信じ、彼の言葉によってその復活に希望を抱いていた人々の間に、彼の葬られた墓が空になっていた、復活したイエスから声をかけられた、という一部の弟子たちの証言が広まり、そのことを確信する人々が一つの集団を形成することになりました。

イエスの死と復活の意味は、神がかつて予言していた人類の罪を帳消しにする救い主の実現であった、と解釈して教義を打ち立てるのはこの人々のあとのパウロでした。今日のこの物語は、まだイエス復活のうわさしかしらない二人の人が体験した、不思議なことの顛末であります。

イエスの無残な十字架の死という出来事があまりにも強烈で、復活を事実としてまだ受け止められない二人のひとが、エルサレムからエマオという村へむかつてとぼとぼ歩いていました。彼らは、尊敬し、親しく傍にいた先生、ナザレのイエスに起こった悲劇的な事件についても話していたのでしょうか。懐かしいイエスの面影やことばについても話したかもしれません。彼らにはイエスはまだ死んでしまった人ではありませんでした。イエスの墓は空っぽで、彼は生きている、と言った者がいるとは聞いていても、半信半疑か、ほとんどまだ信じられないか、という認識だったでしょう。

その、あやふやな思いで歩いている二人に誰かある人がふっと近づいてきて一緒に歩き始めたというのです。私たちの経験でも、何気なく見知らぬ人と、旅で一緒になり、名も知らぬまま言葉を交わす、ということはありません。

福音書の引用はここで少し省きますが、彼らとその人との対話は深まって、彼らは知っている限りイエスのことをその人に話します。おそらくまだ不安でいる彼らは、その人が事件の詳細

細を知らないのだとばかり思つて、堰を切つたように話したくなつたのでしよう。その人が復活のイエスなのに気がつかない、彼らを責めるわけにも行きません。目の前にあるものが全く見えていない、あるいはわかりきつたことがわからない、ということをも人間はよくしてしまふからです。

さて、二人がまだわからないでいるまま、その人は、キリストすなわちみずからのことが聖書全体に記されているではないか、と解き明かしたのです。

物語の中ではその後も、ふたりはなおその人の正体がわからないことになっています。目的地エマオに着きます。その人はさらに先へ行きたい様子なのを、二人は引き留めます。彼らはまだイエスその人だとわかつていないのですが、道々その人に教えられ、だんだんわかつてきた、あるいはその力に引きつけられてきた、ということでしょう。

ひるがえつて、その人、復活のイエスはエマオからさらにどこへ行きたかつたのでしよう？ エルサレムへ、なら逆戻りになつてしまいます。ひよつとして、全世界へ福音を伝えに？ などと私はその行き先について思い描きます。

さてエマオで一行が休んで過ごす、印象的なひとときで、ようやく彼らはその人が復活のイエスであることに気づきます。レンブラントの絵画を誰しも思い起こすでしょう。静かにパンを割くキリストが食卓の中心にいます。その仕草でわかつた、ということです。そうするとすぐ

イエスの姿は見えなくなりました。物語ではよくある流れではありません。

物語の後をたどると、二人はすぐエルサレムの仲間たちのところへ、おそらくエマオでの喜びの体験を伝えようと走って戻ります。そこにいた仲間もまた、同じ体験をしていることがわかります。大事なのは、弟子たちの間でイエスは復活した、それも共に食事をなさるほど確実に、という認識が広まり、それが共同体の確信となり、最初のクリスチャンの群れが生まれた、ということなのです。この最初の群れが、やがて聖霊が下るといふ、また新たな奇跡を経験して教会となったことは、ルカ福音書の続編である使徒言行録に記されています。それ以来キリスト教の教会の歴史は切れ目なく続き、この東北学院につながっているのです。

このことに付随して、今日の聖書の文章の中で、二人の弟子に起こった二つのことを、私たちの生き方にも共通することとして記憶にとどめたいと思います。

エルサレムを離れ、エマオに向かっていた二人は、絶望し、うちしおれていたのでしよう。その二人のところへ、「イエス御自身が近づいて来て、一緒に歩き始められた」(一四)ということです。大きな声で励ましたり、先頭に立って導いたり、ではなく、一緒に歩いてくださったのです。絶望を理解し、慰めるように、です。私たちも、本質的に弱く、頼るものを持たないことを自覚します。常に追い立てられ、他人の評価をばかり気にしています。その私たちに、そっと近づいて、寄り添って歩いてくださる方がいるのです。弱さを私が共に担う、私があな

たのことを心にかけている、痛みを癒やしてあげる、と。人類の救いのために死に、しかし復活したイエスがそう言われる。これほど確実な保証はないのです。

もう一つは、イエスが姿を消した後、二人はエマオに来る途中「道で話しておられるとき、また聖書を説明してくださったとき、わたしたちの心は燃えていたではないか」(三二)と語り合ったことです。心が躍る、喜びに満ちあふれる、それも深い、体の奥底から湧き上がるような感動。多くの人が最近感じなくなっていることではないでしょうか。そのような現代人である私たちが、心の燃えるような思いを抱かせる同伴者がいてくださる、エマオ途上の二人がそのことを示している、そう信じたいと思うのです。

イエス・キリストの父なる神さま、弱く、罪深く、いつも不安に陥りがちな私たちに目をとめ、近づいて来て共に歩いてくださることを感謝いたします。そのことを思うだけで私たちは、心が躍ります。この思いをすべての人に共有させてください。

主の御名によって祈ります。アーメン

「謙遜」と「謙虚」

院長 佐々木 哲 夫

高慢こうまんには軽蔑けいべつが伴ともない、
謙遜けんそんには知恵ちえが伴ともなう。

箴言 一章二節

同じおなように、若い人わかひとたち、長老ちやうろうに従したがいなさい。皆互みなたがいに謙遜けんそんを身みに着つけなさい。なぜな
ら、「神かみは、高慢こうまんな者ものを敵てきとし、謙遜けんそんな者ものには恵めぐみをお与あたえになる」からです。

ペトロの手紙一 五章五節

終おわりに、皆心みなこころを一つひとに、同情どうじようし合あい、兄弟きやうだいを愛あいし、憐あわれれみ深ふかく、謙虚けんきよになりなさい。

ペトロの手紙一 三章八節

箴言の聖句と類似の聖句が、ペトロの手紙第一に記されています。「神は謙遜な者に恵みをお与えになる」ので「皆互いに謙遜を身に着けなさい」と勧められています。他方、ペトロの

手紙第一 三章八節では「謙虚」になりなさいと勧められています。「謙遜」な者になることと「謙虚」になることとは、どう違うのかと思いました。

当該箇所の「謙遜」と「謙虚」のギリシア語原語は、表記が若干異なりますが、語根を共有する同系語で、いずれも *humble* と英訳し得る単語です。すなわち、「謙遜」と「謙虚」は原語を勘案するならば、置換可能な邦訳語です。ですから、謙遜と謙虚はどう違うのかとの問題は、原語における解釈という以上に、日本語の意味把握の問題であるということになります。さて、国語辞典を調べると次のように説明されています。

「謙遜」 へりくだること。控え目な態度をとること。

「謙虚」 へりくだって、すなおに相手の意見などを受け入れること。

ここでは、自分を劣ったものとしていやしめる意味の言葉の「卑下」は、当該箇所文脈に合わないので考察対象から除きます。

スポーツ選手や著名人などプロフェッショナルな人のインタビューや話などを聞いていると、時々、自信満々で傲慢と思えるほどの態度を示す人がいます。その態度は謙遜とは思えないのですが、彼らの多くは、態度とは裏腹に、その道の先輩の教えや他者の意見に真摯に耳を

傾けて積極的に学び取り、陰でかなりの努力をしている人たちであることが少なくないことを私たちは知っています。換言するならば、彼らは、見た感じは謙遜ではないけれど、内実においては謙虚な人であると表現できます。

シカゴに留学していた若い頃、アルバイトで一部上場大企業の社長さんの通訳をしたことがありました。彼は、提携先の米有名企業のシカゴ工場の視察に単身乗り込んできたのでした。スーツケースをまとめるのに手間取っているので約束の時間に合わないからホテルの部屋に来るようにとの連絡を受けました。部屋の隅に立ってパッキングの様子を眺めている私に、社長は荷物の一個を示し、「これを部屋に置いていつでも大丈夫かな」と聞いてきました。時間もないし手続きが面倒くさいことは承知していたのですが、私は、シカゴ在住五年の経験から万が一のことを考えて「クロークのセイフティボックスにお預けになった方が良いでしょう」と答えました。すると彼は「君がそういうのだからそうしよう」と言って、すぐさまその荷物をクロークに預けることにしたのです。海外業務経験の豊富な大企業の社長が若い留学生の言葉に対して示した謙遜で謙虚な対応を目の当たりにして、私は驚きつつ、このような人柄の社長の会社は堅実に発展するとの印象を持ちました。また、彼の会社の製品なら信用できると思いい、その会社の製品の隠れファンになりました。確かに、今日、その会社は、当時に比べると

大きく成長し、多種多様な商品を私たちの身近に流通させています。

「謙虚な人ほど伸び易い」と言われます。それは、仕事のことだけでなく、勉強や研究においても妥当します。謙遜や謙虚は、その人の伸び代を大きくするのです。なぜなら、へりくだる者には知恵がともなうからです。「謙遜には知恵が伴う」の聖句を「謙虚になりなさい」の聖句とともに心に刻み、伸び代の大きな人物になっていただきたいと思えます。

誰も思い巡らすことがなかった苦しみ

仙台広瀬河畔教会 望月 修

マルコによる福音書 一四章三二―三六節

32 一同がゲツセマネという所に来ると、イエスは弟子たちに、「わたしが祈っている間、ここに座っていないさい」と言われた。33 そして、ペトロ、ヤコブ、ヨハネを伴われたが、イエスはひどく恐れてもだえ始め、34 彼らに言われた。「わたしは死ぬばかりに悲しい。ここを離れず、目を覚ましていなさい。」35 少し進んで行って地面にひれ伏し、できることなら、この苦しみの時が自分から過ぎ去るようにと祈り、36 こう言われた。「アツバ、父よ、あなたは何でもおできになります。この杯をわたしから取りのけてください。しかし、わたしが願うことではなく、御心に適うことが行われますように。」

ただ今読みました箇所は、聖書のクライマックスに至る直前の場面です。主イエスが、すべての人間の罪を贖うために、十字架の死へと赴く前の晩でした。主イエスが、父なる神に、激しい祈りをささげています。最後の晩餐を弟子たちと囲んだあとのことでした。

主イエスと弟子たちは、いつもの祈りの場所と定めていたゲツセマネにやって来ました。この直後に、弟子の一人であったイスカリオテのユダに裏切られ、捕らわれることになるのですが、ここには、死を恐れている主イエスの姿が描かれています。

このように書いてあります。「……イエスはひどく恐れてもだえ始め、彼らに言われた。『わたしは死ぬばかりに悲しい。……』少し進んで行って地面にひれ伏し、できることなら、この苦しみの時が自分から過ぎ去るようにと祈り、」（一四・三三～三五）とあります。そして、『……この杯をわたしから取りのけてください。……』（一四・三六c）と祈った、というのであります。

「ルカによる福音書」は、その様子を「（……イエスは苦しみもだえ、いよいよ切に祈られた。汗が血の滴るように地面に落ちた。）」（二二・四四）と書き記しています。たいへん有名な描写です。

主イエスは、何故、これ程までに、死ぬことを恐れ、苦しまれたのでしょうか。主イエスは、神の独り子です。人となられた神でした。そのような者が、何故、それほどまでに死を恐れているのか、ということなのです。

私たち人間は、この世に生まれたからには、死にます。遅かれ早かれ、死を迎えます。私たちは、どのように、この死を迎えるでしょうか。病氣や事故で死ぬこともあります。

M・ルターは、この時の主イエスについて、「この人ほど、『死』を恐れた人はいない」と言っています。

私たちは、こんなみっともないほどに苦しみ悶えたくない、と思うであります。それと言いますのも、世間では、偉人と言われるような人、立派な人、わけても宗教家などは、死を恐れないものだ、と言われているからです。

例えば、ソクラテスは、毒杯をあおいで死んで行った、と伝えられています。宗教家の中には、殉教の死を遂げる者もいます。そのような人たちは皆、死を恐れず、毅然として、死を受け入れ、場合によっては、喜んで死んで行ったのであります。

それに対して、主イエスは、死を恐れ、苦しみ、悶えているのです。主イエスは、主イエスのために喜んで死んで行った殉教者よりも、死を恐れた、と言えなくもありません。何を、そんなに恐れているのでしょうか。

主イエスは、罪人としての死を苦しんでいるのです。それは、犯罪を犯して死刑を受ける者の苦しみということも含まれるかもしれませんが、この場合の罪人とは、神に背いた罪人とし

ての「私たちの死」のことであります。神に背いて来た者が、その最後で、その責任を問われ、しかも、それを負うことができずに、苦しみ悶えながら死んで行く、その恐ろしさ、それに怯え、悶えているのです。つまり、この私たちの味わう死の苦みを、私たちに代わって、ここで味わっているのです。そのようにして、私たちの死を、私たちに代わって、味わい、苦しんでいる、ということなのです。

このように申しますと、いや、私たちは、死を恐れてはいるかもしれないが、死を恐れない人もいれば、実際のところ自然な仕方です。死を迎える者もいるではないか。たとえ、病气や老いで苦しむことがあっても、最後は、家族や親しい者たちに囲まれ、穏やかな死を迎えることができたということを見聞きしている。だから、主イエスが、私たちに代わって、死を恐れ、苦しんで死んで行った、と言われても・・・、と思う人は多いではありません。

しかし、それほど、私たちは、実は、死に対して鈍感になつて居るのです。いや、死をできるだけ話題にしないようにしていますし、できるだけ避けようとしているのではないのでしょうか。しかし、どのように考えようとも、最後は、独りで、死を迎えなければなりません。私たちは、死は穏やかに迎えたいと思ひ込んで居るだけではないでしょうか。

本当を言えば、人間の死には、自然な死というものはありません。穏やかな死というものはありません。それなのに、死んだら、天国に行けると、何の根拠もないことを、お互いに言い合って、死の恐ろしさを避けているのではないのでしょうか。

また、最近では、まるで誕生日を迎えるかのように、穏やかに死を迎える演出染みたようなことを、本人も考え、周囲の者もしたりしています。しかし、そうしてみたことで、私たちは、最後は、独りで、死を迎えなければなりません。

死に際して問われるのは、神に背いて来た罪であり、その責任です。実は、誰も彼も、神の御前に、神に背いて来たことの責任が問われるのです。しかも、深刻なのは、罪の償いを果たすことができないまま死んで行くことです。

その点で、私たちは、死を、曖昧にしているのではないのでしょうか。真面目に考えようとならないのです。

しかし、それは、私たちが、罪の深さを知らないからです。罪の深さが判らないほどに、私たちは罪深い、と言ったらよいのです。神から見捨てられる恐ろしさが判らないほどに、神に背いているのです。

主イエスは、そういう私たちの身代わりとなって、神に背いている罪人としての私たちの死

を、身悶えするほどに恐れ、そして、死んで行かれたのであります。つまり、主イエスは、本来、私たちが苦しむ死の恐ろしさを、ここで、味わっているのです。誰も思い巡らすことがなかった苦しみであり、死でありました（イザヤ書五三章参照）。

しかし、そのお陰で、私たちは、本来の死を、逃れる^{のが}ことができます。主イエスが、すべての人間の罪を贖うために苦しまれ、そして、死んで行かれたのには、そのような意味での救いをもたらす救い主であることを、この場面は証しているのです。

救いと言っても、いろいろと考えることができます。しかし、この箇所では、私たち人間を救うために、私たちのいちばんに恐れているはずの死が、本当はどういうものであるかを明らかにしているのです。

聖書には、いろいろなことが書いてあるように思われますが、しかし、主イエスの与える救いは、罪からの救いです。その結果としての、死からの救いです。そのことを、この箇所を通して知ることができるのです。

父なる神。

死ぬという事実を避けて、あるいは誤魔化して、生きている私たちです。それ故に、本当の

平安も慰めも、そして、希望さえ、お互いに見い出すことができず、適当に先送りして、いい加減にしている私たちです。どうぞ、死を超えた命のあることを教えてください。

この祈りを主イエス・キリストの御名によって御前に捧げます。アーメン。

遙か遠い昔からのまなざし

仙台東一番丁教会 瀬谷 寛

マルコによる福音書 一章一六―二〇節

16 イエスは、ガリラヤ湖のほとりを歩いておられたとき、シモンとシモンの兄弟アンデレが湖で網を打っているのを御覧になった。彼らは漁師だった。17 イエスは、「わたしについて来なさい。人間をとる漁師にしよう」と言われた。18 二人はすぐに網を捨てて従った。19 また、少し進んで、ゼバダイの子ヤコブとその兄弟ヨハネが、舟の中で網の手入れをしているのを御覧になると、20 すぐに彼らをお呼びになった。この二人も父ゼバダイを雇い人たちと一緒に舟に残して、イエスの後について行った。

子どもの頃、宇宙の広さを学びました。星の距離を、光の速さで計ることを学びました。

今、見ている星の光が、何年、何十年、何百年、何億年、ずっと昔に放たれた光が、今ここに届いている、というのです。とても不思議な気分がしました。

主イエスは、わたしたちを見てくださっておられます。どれくらい前からでしょうか。何年前、何十年前、何百年前、何億年前……。わたしたちが気づくよりも遥かにずっと昔から、主イエスはわたしたちに目を留めてくださっておられます。そして、こちらへと歩いて、近づいてくださいます。

マルコによる福音書は、四つの福音書の中で、一番短い福音書です。それが意味するのは、どの言葉一つとっても、省略できない言葉、そして物語が残っている、ということなのです。

四人の男たちのもとに、主イエスは歩いて近づいて来られました。そして主イエスはこの四人をご覧になりました。見てくださいました。そして、「わたしについて来なさい、人間をとる漁師にしよう」と招いてくださいました。これも、省略することができない物語です。この事なしには、これから後に行われる、主イエスのお働きは始まりませんでした。

お気づきになられたでしょうか。主イエスは、そのご生涯を通じて、愛の働きを貫かれました。そのあらゆる働きよりも先に、まず弟子たちをお召しになられました。主イエスは、弟子たちを選ばれて、用いようとされたのです。主イエスのお働きを見て、弟子たちがついてい

た、というのではありません。順番は全く逆です。弟子たちにとって、主イエスが必要だったのではありません。主イエスが、弟子たちを必要としておられました。その愛の働きのために、必要としておられました。そして弟子たちは、神の言葉を宣べ伝え、愛の働きを担うようになったのです。

おかしな言い方かもしれませんが、わたしたちが主イエスと歩きたい、と願うよりも先に、主イエスの側が、わたしたちと歩きたい、と願ってくださっておられます。わたしたちが主イエスを必要とする前から、主イエスの側が、わたしたちを必要としてくださいます。必要としてくださるがゆえに、欠けだけのわたしたち、罪にまみれたわたしたちのために、主イエスは十字架で死んでくださいました。愛の働きの本当の姿を見せてくださいました。

ここに出てくるシモンは、後にペトロ、と呼ばれるようになる人物です。そしていろいろなことがあった後、教会の愛の働きを担うようになりました。アンデレ、ヤコブ、ヨハネも、皆それぞれ、この後、教会の指導者になります。それだけでなく、伝説では、皆迫害されて、殉教の死を遂げた、とまで言われています。死に至るまで殉教を遂げた人の始まりが、ここにあるのです。

教会の指導者になったシモンは、何人もの人に聞かれただろうと思います。「先生は、どう

して教会の指導者になったのですか」「イエス様に呼ばれたんだ。『ついて来なさい』と言われたんだ。だから、教会に仕えるようになったのだ。それ以外に、理由は見つからないんだ」。神さまが、見ていてくださって、必要としていてくださる人の姿です。

主イエスは、ガリラヤの辺りを「歩いて」おられました。そのとき、弟子たちにお声をかけられました。そして弟子たちは、主イエスの声を聴きながら、一足、一足歩いていきました。そのようにして主イエスの愛のお働きを担いました。

わたしたちにも、主イエスの愛のお働きを一緒にさせていただくことができます。なぜなら、主イエスは、わたしたちのことも見ておられるからです。声をかけてくださるからです。走っておられず、歩いておられるからです。わたしたちを必要としてくださるからです。そして、そのわたしたちが、罪人であるにもかかわらず、そのわたしたちに代わって十字架に死んでくださって、赦してくださって、主イエスの愛の業を、わたしたちに担わせてくださるからです。「わたしについて来なさい」。主イエスが、背中を見せて歩いてくださいます。「わたしについて来なさい。あなたはその後を歩いたらよい。わたしがあなたの手を引き、引っ張っていいこう。あなたはそれに従えばよい」。はるか遠い昔から、みなさんのことをご覧に

なっておられた主イエスが、みなさんを招いておられます。

〈祈り〉

主イエス・キリストの父なる神さま、

わたしたちの考えの及ばない、ずっとずっと昔から、主イエスはわたしを見ていてくださり、それゆえに、歩いて、近づいて、「わたしについて来なさい」とおっしゃっておられることを、そのようにして必要とさせていただいていることを、感謝いたします。そのために、十字架におかりくださったことを感謝いたします。こんなわたしでも、主イエスが歩いてくださるので、その歩幅に合わせるようについていけるかもしれません。この小さなわたしの手を引いて、主イエスの後をついていくことができるように、助けてください。主イエス・キリストのみ名によって、祈ります。アーメン

言葉は光となって命を照らす

仙台東六番丁教会 中本 純

ヨハネによる福音書 一章六〜一三節

6 神かみから遣つかわわされた一人ひとりの人がいた。その名なはヨハネである。7 彼かれは証あかしをするために来た。光ひかりについて証あかしをするため、また、すべての人ひとが彼かれによって信しんじるようになるためである。8 彼かれは光ひかりではなく、光ひかりについて証あかしをするために来た。9 その光ひかりは、まことまことの光ひかりで、世よに来てすべての人ひとを照てらすのである。10 言ことばは世よにあった。世よは言ことばによって成なったが、世よは言ことばを認みとめなかった。11 言ことばは、自分じぶんの民たみのところへ来たが、民たみは受け入れなかった。12 しかし、言ことばは、自分じぶんを受け入れた人ひと、その名なを信しんじる人々ひとびとには神かみの子ことなる資格しかくを与あたえた。13 この人々ひとびとは、血ちによってではなく、肉にくの欲よくによってではなく、人ひとの欲よくによってでもなく、神かみによって生うまれたのである。

今年もクリスマスの時を待ち望むアドヴェントの時期を迎えました。アドヴェントとは、ラテン語の「アドウェニオー」から来ている言葉で、「待ち望む」という意味があります。イエ

ス・キリストがクリスマスの時にやって来られる、その時を待ち望む時として過ごしています。そうしたキリストを待ち望む時として過ごす私たちに対して、この『ヨハネによる福音書』の聖書の言葉は「イエス・キリストは人間を照らす本当の光だ」と伝えていきます。

六節以降にイエス・キリストを証しするために遣わされた洗礼者ヨハネについての記述があります。「神から遣わされた一人の人がいた。その名はヨハネである。彼は証しをするために来た。光について証しをするため、また、すべての人が彼によって信じるようになるためである。彼は光ではなく、光について証しをするために来た。」ここで語られている「光」とは、イエス・キリストを指しています。九節にあるように、イエス・キリストは「まことの光」であり、「世に来てすべての人を照らす光」であることが語られています。私たちを照らす「光」、それはどのようなものでしょうか。私たちの人生は時に、旅になぞらえて語られることがあります。この人生がある目的地に至るまでの通過点だと見て取るならば、私たちはその歩みを歩み続ける旅人だと言うことが出来ます。けれども時に、その旅路はひどく不安定で、入り組んでいて、時に無目的に輪郭を失い、気が付けば道を踏み外してしまっている、そのようなこともあります。それは人生を旅する者全てが味わう普遍的な危機であると言えます。けれども、聖書はこの私たちの旅路に迷いようも無い、大きな本当の光が据えられていることを伝えるのです。人生は闇路ではなく、イエス・キリストが照らす光によって私たち一人ひとりの

歩みは明るく照らされていることを語るのです。

そのように、「まことの光」として語られているイエス・キリストですが、続く一〇節から突如、今度は「言」として語られていることに気付かされます。一〇節にこうあります。「言は世にあった。世は言によって成ったが、世は言を認めなかった。」「言」もしくは「言葉」とも表記しますが、言葉というのは、言ってみれば私たち人間が生きているこの世界を支配する大きな要素です。私たちが毎日の生活で大なり小なり影響を被る要素です。私たちは日々の生活の中においてあらゆる言葉に囲まれて生きています。それらは時に私たちを励まし、勇気づける力になります。けれども、その逆に私たちの心を深く傷付ける凶器ともなります。少し前に朝日新聞のコマーシャルにこのようなくだりがありました。

「言葉は身勝手で、感情的で、残酷で、ときに無力だ。それでも私たちは言葉のチカラを信じている。」

この世界に氾濫する様々な言葉。それらはすべてその発信源があり、その発信源は人の心である。と捉えることが出来ます。言ってみれば、「言葉とは、それらを口にする私たち一人ひとりの人格の投影、つまり、人格そのものである。」とすることが出来ます。そうした時、私たちは言葉が氾濫するこの世界で生きて行く上で、少しでも良い言葉に触れたいと願います。より良い言葉に触れて、そのことによって、心育まれ、人格を形成し、豊かな人生を生きて行き

たいと願うのです。そして時に、傷つき疲れ切った自分の心を、そうした温かい言葉をもって癒やして欲しいと願うのです。そのように、「少しでも良い言葉に触れたい」と願う私たちの歩みの中で、聖書は私たちに最高の言葉があることを伝えます。それが神の言葉です。人間の語る言葉がその人の人格を反映したものであるように、神の言葉とは、神様の人柄、つまり神様がどのようなお方であるかを表わすものです。私たちは神の言葉を通じて「神がどのようなお方であるか」を知ることが出来ます。そして、イエス・キリストこそが「神の言」であり、このお方の語る言葉と行いを通じて私たちは神の神格（人格）に触れることが出来るのです。そして、時に傷つき疲れ切ってしまったこの心を神の言葉を通じて温かく照らして頂くことが可能とされるのです。

一一節に「言は自分の民のところへ来たが、民は受け入れなかった。」とあります。これは神様の言葉として、この世界にやって来られたイエス・キリストがこの世の人々から受け入れられなかったことを伝えていきます。イエス・キリストは、神の神格を伝える神の言です。神のたった一人の子としてお生まれになりました。けれども、そのような神の言であり、神の独り子であるイエス・キリストは大きな城のベッドに寝かされてお生まれになった訳ではありません。柔らかな毛布にくるまれて寝かされていた訳でもありません。イエス・キリストは、動物が繋がれている家畜小屋でお生まれになったと書かれています。そして、その家畜小屋で、動

物が食べる餌を入れるための飼い葉桶に寝かされてお生まれになったのです。ともすれば、一見、美しい出来事として見られがちなクリスマスの出来事ですが、でもよく見るとそこには人間が持つ妬みや心の難しさ故に神の御心を拒絶した人間の姿が如実に描かれていることに気付かされます。しかし、神はたとえ御自分の独り子が飼い葉桶に寝かされて迎えられても、そのことを受け入れてまで、私たちに「まことの光」、「神の言」を与えてくださろうとするのです。同じ『ヨハネによる福音書』の三章一六節以降にこのような言葉が出てきます。「神は、その独り子をお与えになったほどに、世を愛された。独り子を信じる者が一人も滅びないで、永遠の命を得るためである。神が御子を世に遣わされたのは、世を裁くためではなく、御子によって世が救われるためである。」

たとえ、私たちが苦しみの極みの極み、嘆きの底の底で、あたかも闇路の中を一人孤独に歩んでいるように感じられる時があったとしても、神は「まことの光」であり、「神の言」であるイエス・キリストを差し出して私たちを必死に救い出そうとされるのです。私たちのこの心が暗闇で覆われることのないように、傷つき疲れ果ててしまったこの心を神の言葉が光となり、決して遠く離れるお方ではない。「ドイツの牧師、ボンヘッフアーはそう語っています。クリスマスの時を待ち望むアドヴェントは、単に今から約二千年前の昔話ではなく、いまこの

時、自分の人生に対し無目的になったり、悲嘆にくれてあたかも闇路を歩んでいるような人々に光が訪れたことを現在進行形で伝える出来事なのです。

あなたはどこに立っているか

名取教会 荒井偉作

出エジプト記 三章一―一二節

モーセは神に言った。「わたしは何者でしょう。どうして、ファラオのもとに行き、しかもイスラエルの人々をエジプトから導き出さねばならないのですか。」神は言われた。「わたしは必ずあなたと共にいる。このことこそ、わたしがあなたを遣わすしるしである。」(一一節・一二節)

今、皆さんが「あなたが今いる場所はどこか」と問われたら、何と答えますか。長椅子に座っている。そう即答できます。また、新入生の皆さんにとっては、入学式で座っていたのと同じ空間にいる、とも言えます。ところで、ここに大学が建つ以前の様子、まだ野生の世界だった風景を想像することは出来ますか。実際にキャンパス候補地として下見に来た、大学職員の方からお話を伺ったことがあります。当時の学長であり学院長でもあった小田先生と一緒に長靴を履いて藪の中をかき分け、まだ原野だったこの小高い丘を登って視察したそうです。

数十年前、まだ何もない山林に立ち、この場所に若者たちのための学び舎を建てよう、その中心として礼拝堂を建てよう、というビジョンを与えられた先生方の思いと夢とに心を寄せてみてください。皆さんには出来ると思います。大学という高等教育機関は、特にキリスト教信仰に依って立つ大学は、目に見えないものを大切にし、追求するところです。時間や空間を越えて思考を巡らせ、常識に囚われることなく物事を見る、ということを重要視します。つまり私たちは今、ただ単に木造の重い長椅子に座っているだけではありません。何もなかった山林に先達の信仰と志こころざしとによって建てられた、礼拝という「場」で、多くの卒業生たちの思いと共鳴しながら、共に聖書の言葉に耳を傾けているのです。

視点を変えてみましょう。今静かに座っているこの空間も、地球の自転と公転とで常に高速で移動し続けています。こうして落ち着いて礼拝を守っているとウソのようですが、科学的には事実です。これは物理学的な視点ですが、考えてみれば私たちの人生も同じようなものではないでしょうか。鳥のようにはるか上から自分の人生を見下ろせば、居場所なんて曖昧な、小さな自分を発見するのです。

逆に言えば、そんな曖昧で不安定な世界の只中で私たちが倒れずにいられるのは、見える形・見えない形でそっと支えられている証しでもあります。

この四月に、小笠原政敏先生おがさわらまさとしという方が神様の御許に召されました。長く東北学院大学の教授と県内の教会での牧師、さらに教会幼稚園の園長を兼任された方でした。私自身はあの震災以来、名取教会に仕えている身ですが、小笠原先生はその名取教会を三十五年前に創立した責任者でもあり、震災後はご家族と共に名取教会の礼拝に出席し、被災した小さな教会をそっと支えてくださいました。九十歳代になってもお考えと言葉とが明瞭で、実に聡明な先生でした。お若い頃には第二次世界大戦で出兵、その後の留学生生活を経て戦後のご苦労なさった経験談も幾度か伺いました。

私が今日まで牧師として、特に説教者として立ち続けることが出来たのは、この小笠原先生から忘れられぬ一言を頂いたからです。震災後の混乱期、私は牧師として独り立ちしたばかり。新米として右往左往していました。ある時、礼拝が終わってすぐ、小笠原先生が私を呼び止めおっしゃいました。

「いやあ、荒井先生、実にすばらしい説教でした！ 礼拝中に思わず立ち上がって、拍手しようと思えました！」

耳を疑いました。東北学院で教鞭をとっておられた間、多くの学生たちを厳しく指導なさった先生です。卒業したばかりの駆け出し牧師なんて、手ひどく批判されて当然でした。しかし小笠原先生は、一人の聞き手として、その説教を神様からの希望のメッセージとして聞いた、

心動かされた、とおっしゃいました。実は先生は震災後に最大の余震があつた晩、ご自宅の廊下で転倒して大腿骨を骨折、超人的な回復力で退院までこぎつけましたが、以来ずっと車椅子での生活でした。その先生が、思わず立ち上がりそうになつた。冗談や皮肉ではなく、ストレートで素直な喜びの表現でした。「君の説教はどこそがいいね、ちなみに改善点はね……」などと先生風を吹かせません。君の説教を通して喜びを受け取つた、と笑顔でおっしゃるので、これ以上の励ましがあるでしょうか。この弱い私を立たせるに十分な一言でした。

平日に何度か先生を訪ねてお話を伺う中で、先生は印象的な事を告白なさいました。

「私は、ずっと神様に問うているんですよ。なぜこんな私を、あなたは牧師としてお立てになつたのですか、と。今も問い続けているんですよ。」

大勢の卒業生が、この先生の前では頭が上がらない。そんな「偉い」先生が、神様の前では小さく欠けた器として立っている。信仰者としての謙遜な姿勢に、びっくりしました。戦争も生き抜いた、戦後の混乱期も乗り越えてほうぼうで頑張つた、新しい教会も開拓したぞ。そんなことは一言もおっしゃらず、ただ一人の小さな存在として、神様の前に立っていました。卒業生として、牧師として忘れえぬ言葉を聞きました。

今日の聖書箇所は、出エジプト記の三章です。文字通り、エジプトから神の民が脱出する、

解放の出来事の始まりです。モーセという人物はその立役者で、聖書の中でも目立って活躍する人物の一人です。しかし彼が偉大だったわけではありません、この壮大なご計画のために神様が選び出し、お立てになりました。

彼はこの三章では逃亡者でした。生まれ育ったエジプトで殺人を犯し、遙か遠くの外国で身を隠しています。現地の女性と結婚し、子どもをもうけ、一見安泰な日常を送っていました。義父の羊を世話していましたが、ある日神様から声を掛けられます。見出しには「モーセの召命」とあります。これから行われる大解放の先導者として、神様はモーセに目を留められたのです。そしてモーセの日常の中に忽然と現れ、お前は今どこに立っているのか、と心を揺さぶるのです。モーセは困惑したでしょう。どこって。今、羊を世話しています。でも実は逃亡の身です。エジプトから逃げてきました。しかし、そのエジプトも本来の故郷ではない、先祖たちが昔に移住して……。彼の頭の中を複雑な思いがよぎったに違いありません。彼は自分がどこから来て、どこに立ち、どこへ行くべきかを見失っていました。罪を犯して隠遁生活をしているうちに思考が停止していました。

この後、モーセは神様に問います。私は何者でしょう。なぜこんな私を選び、遣わすのですか。神様の答えは意外でした。「わたしは必ずあなたと共にいる」。モーセが優秀だから注目した、と答えません。大罪を犯し逃亡中なのも承知の上、アイデンティティーが不安定なのも前

提。そんなお前がどこにしよう、わたしが共にいる、と約束なさるのです。

私たちの資質を問わず目を留めてくださる神。たとえ火の中水の中、災難と困難の中でも、私たちと同じ場に立ってくださる神。ここに愛があります。私たちへの神様の姿勢が具体的に示されています。私たちが自分自身の立ち位置も進むべき道も見失っていても、私たちは独りではない、という希望と慰めが約束されているのです。

「主の祈り」のすばらしさ

仙台南伝道所 平賀真理子

マタイによる福音書 六章九節―一三節

9 だから、こう祈りなさい。『天におられるわたしたちの父よ、／御名が崇められま
すように。10 御国が来ますように。御心が行われますように、／天におけるように地の
上にも。11 わたしたちに必要な糧を今日与えてください。12 わたしたちの負い目を赦し
てください、／わたしたちも自分に負い目のある人を／赦しましたように。13 わたした
ちを誘惑に遭わせず、／悪い者から救ってください。』

キリスト教で「救い主」と証しされているイエス・キリスト御自身が、しばしば祈られたこ
とは、福音書に書き記されています。そのイエス・キリストが、弟子達や話を聞きに来た民衆
に、「祈りの言葉」を教えたとして伝わっているのが、今お読みした「主の祈り」です。これ
は、全世界の教会で、また、そこで行われる礼拝で、必ず声に出して祈られている「祈り」で
す。

この祈りの言葉の前には、それまで行われていたユダヤ教指導者達の祈り方の間違いが指摘されています。ユダヤ教では、祈りの言葉を口に出し、しかも、出来るだけ多くの人に、自分が祈っていることをアピールするように祈っていたようです。祈ることで尊敬されるならよいのですが、尊敬されることが目的で「これ見よがしに祈る」という、本末転倒な思いで祈るユダヤ教指導者が多かったのです。

その祈りの姿が間違っていることを、イエス・キリストは指摘なさったのです。それは、イエス・キリストが神の御子であって、天におられる「父なる神様」が、「祈り」において、何を喜ばれるかどうか、よくご存じだったからです。

六節では、隠れたことを見ておられる「父なる神様」が、祈りに報いてくださると、教えてくださいなさっているのです。キリスト教における「祈り」は、神様との対話を願うものであって、この世での周りの人間に優位に立つための道具ではないからです。この世のものすべてを断ち切り、神様だけに集中して祈っているか？ その姿勢が、まず大事とおっしゃっているのです。

しかし、キリスト教の祈りにおいて、私達の祈りの姿とは決定的に違うことがあります。私も、日本の多くの家庭のように、仏壇のある家で育ち、朝夕、仏壇にご飯を備え、その前で手を合わせて祈るという教育を受けてきました。そういう教育を受けてきた私達の多くは、祈る

時の言葉を教えられていません。その時々自分の願いを祈っています。例えば、「今日のテスト、あまり勉強できなかったけれど、どうぞ、良い点数を取れますように！ 合格できますように！」というように祈ることが多いのではないのでしょうか。ところが、イエス・キリストは、八節の後半には、神様は、私達一人一人に必要なものを御存じなのだから、安心していいとおっしゃりつつ、九節以下で、人間が本当に祈るべき言葉を教えてくださいました。

この「主の祈り」では、まず、「私達の父よ」と呼びかけていいと教えてくださいました。これが今までの私達の祈りと大きく違う点です。神様に対して、イエス様は「父よ」と呼びかけています。そして、イエス様を信じている人は、同じように、神様を「父よ」と親しみを込めて呼べるのだと教えてくださいました。それを知らなかった時は、私自身も日々祈っていても、その相手について、あまり考えたことがありませんでした。でも、イエス・キリストの福音によって、私達人間は、自分の祈りの相手が「父よ」と呼ばれることを望まれる神様であると知らされたわけです。

さて、次に「主の祈り」の言葉の内容を見てみましょう。前半三つの言葉は、何よりもまず、人間は「神様の栄光」がこの世に行き渡るように祈ることが重要だと教えられています。

「御名が崇められますように」とは、聖書で証しされている神様、この世を造り、人間一人一人を愛して下さっている神様のことを人間が本当の意味でよく知り、そのすばらしさを感じ

謝出来るようになるということです。「御国が来ますように」とは、本当の神様の愛が、この世に満ちるようにと願うことです。「御心が行われますように」とは、神様の思いがこの世に素直に行われるようにと祈ることです。ここには、この世の支配権が悪霊に乗っ取られていて、この世や人間はその支配下にあつて、本来の主人である神様の思いが邪魔されていると言ふ前提があります。

後半三つが私達人間に直結した祈りです。まず、必要な「衣食住」を祈ることが許されています。しかし、一日分の必要分です！ 欲を出して、余計にもらうことを願う必要はないのです。翌日は翌日、つまり、毎日毎日、神様の必要な恵みがいただけるという信頼があるので、す。

「負い目を赦してください」は、教会では「罪」と訳されて、口に出されています。神様に対する「負い目」とは、神様と面と向かった時、自分が悪かったなあ、面と向かうなんて申し訳ないなという思いを抱かせるものです。キリスト教では、それを「罪」と表現します。その赦しを神様に素直に請えることが素晴らしいのです。

「誘惑に遭わせず、悪い者から救ってください」は、教会では「試みに遭わせず、悪より救い出したまえ」と祈ります。自分の弱さ、愚かさをよく知っている人間にとって、神様を信頼してこのように祈っていいのだと知らされていることが、大きな慰めになります。

そして、最後に人間にとって相当難しいことについて、イエス・キリストは、ダメ押しをされています。それは、人を赦すということです。人間は、自分が神様に面と向かっていられないような存在、つまり、神様から赦しを請う立場です。なのに、他人が自分にした、ちょっとしたことさえも赦すのが、大変困難なものです。神様という存在を知って、初めて自分についてきちんと見つめられるようになるのではないのでしょうか？

「主の祈り」は、全世界の人口の三分の一を占めるキリスト教徒が、それぞれの言語で祈っている祈りです。世界がこの祈りに満たされています。皆さんも、この祈りを覚え、世界中の祈りに加わってみてほしいと願います。そして、その後に、自分の願い（試験の合格とか、健康とか）を祈ることで、本当の神様との対話を更に求めてください。本当の神様は、救い主イエス・キリストを通して、人間との対話を待ち望んでおられるのです。

善良な正しい人、ヨセフ

東北学院中学校・高等学校 宗教主任 松井浩樹

ルカによる福音書 二三章四四〜五六節

44 既に昼の十二時ごろであった。全地は暗くなり、それが三時まで続いた。45 太陽は光を失っていた。神殿の垂れ幕が真ん中から裂けた。46 イエスは大声で叫ばれた。「父よ、わたしの霊を御手にゆだねます。」こう言っただけで息を引取りられた。47 百人隊長はこの出来事を見て、「本当に、この人は正しい人だった」と言っただけで、神を賛美した。48 見物に集まっていた群衆も皆、これらの出来事を見て、胸を打ちながら帰って行った。49 イエスを知っていたすべての人たちと、ガリラヤから従って来た婦人たちは遠くに立って、これらのことを見ていた。50 さて、ヨセフという議員がいたが、善良な正しい人で、51 同僚の決議や行動には同意しなかった。ユダヤ人の町アリマタヤの出身で、神の国を待ち望んでいたのである。52 この人がピラトのところに行き、イエスの遺体を渡してくれるようにお願いして、53 遺体を十字架から降ろして亜麻布で包み、まだだれも葬られたことのない、岩に掘った墓の中に納めた。54 その日は準備の日であり、安息日

が始まろうとしていた。55 イエスと一緒にガリラヤから来た婦人たちは、ヨセフの後について行き、墓と、イエスの遺体が納められている有様とを見届け、56 家に帰って、香料と香油を準備した。

復活する

婦人たちは、安息日には掟に従って休んだ。

クリスマスの準備期間、アドベント、日本語でいうところの待降節を過ごし、街中でのイルミネーションも、いよいよその輝きを増しています。今やクリスマスの賑やかさはキリスト教会のみならず、形態はともかくとして一般社会においても大いに喜びの時であることは定着し、いや年ごとに派手やかになる印象を持つところでもあります。そこで今日はあえてクリスマスへの入り口ではなく結末、つまり生まれたがゆえに主イエスが亡くなられる、最終場面からクリスマスについてのメッセージを聞きたいと思えます。どのように主イエスが、息を引き取られたかが丁寧に記されています。それに続いて、やはり復活することをかなり意識して「墓に葬られる」ことにまで聖書は記しています。

そこで、今日の聖書に登場する一人の人物に注目したいと思います。「アリマタヤという町の出身のヨセフ」という人物です。後にも先にも、この場面にしか登場しない人物です。聖書

を読みますとこのヨセフが、主イエスの埋葬に関する一切の手続きを取ります。そして、備えていた自分の墓に主イエスを葬るのです。さらに五五節を見ますと、そのヨセフの周りにはガリラヤから主イエスと行動を共にした婦人たちの存在も記されています。本来ならば、この主イエスに従っていた婦人たちの手で主イエスの葬りをするべきであろうし、その手続きの一切をしなければならなかったはずの婦人たちと思うところですが、しかし当時の慣習から、自分の土地でなければ遺体を葬ることができなかった、そういう事情があったのです。そこで主イエスを葬るのはヨセフに任せ、その手伝いに婦人たちはまわったのであります。五〇節をみますとヨセフは、主イエスを十字架に付けることに反対した議員であったことがわかります。自分の無力さを悔いたのでしょうか・・・予め準備していた自分の墓に主イエスを葬ることを決心し、それを聞いた婦人たちもそれに協力をした、そういう背景がここにはあるのです。

ただ、ここで大きな問題があります。それは十字架について殺された、つまりそれは神から呪われて、命を失うという宗教的意味をも含んでいる出来事であります。つまり主イエスの遺体に触れるということは自分の存在さえも、汚れるということを意味したからであります。具体的には、今後は宗教行事に参加することを許されなかったでしょうし、さらに当然のごとく議員としての社会的な地位や名誉にも影響はないはずはないのです。張本人であるヨセフはともかくとして、その背後にある家族の存在を思う時、胸に痛みを覚えるのであります。主イ

エスを墓に葬る、それほどまでに大きな決断と、決心が必要なことであったのであります。ヨセフがなぜこういう行動をとることができたのでしょうか。それは五〇節の言葉に「善良な正しい人であった」。つまり常日頃から、優しい心をもっており、日々を誠実に生きていた人であったことがわかります。ただ、ここにはもっと根本的な動機がありました。それが五一節の後半であります。ヨセフは「神の国を待ち望んでいた」人物であったということです。つまり神様がすべてを支配される世の中、それを心から待ち望んでいたというのであります。ヨセフはその救いを、主イエスに確かに見たのであります。だからこそ、すべてをなげうってまで墓に葬った、いや自らの手で葬りをさせていたできたかたに違いないのであります。

そこでこの十字架の場面で、ルカの特徴的な表現をみてみましょう。「神殿の垂れ幕が裂けた」であります。他の福音書は主イエスが亡くなった後に、「神殿の垂れ幕が裂けた」とあります。ルカだけは、その「死の直前」に裂けたと記されています。「神殿の垂れ幕」とは、神の世界と人間の世界の境界線であります。つまり神殿の垂れ幕のむこうには神がおられると信じられていたのです。「死後に垂れ幕が裂けた」ではなく「死の直前」に垂れ幕が裂けたとするルカの意図は、キリストの地上での最後の活動、十字架の死によって主イエス自らが、私たち人間と神との境界線を取り払われた・・・つまり犠牲と引き換える仕方です。誰もがいつでも、どこでも神の前に立てるようにして下さったということなのです。いやむしろ、その

神と私たちの境界線を取り払うことこそが、この世に生を受けたイエスであった。この境界線をなくすためにこそ、キリストのクリスマスの出来事があつたのです。

この十字架の記事を読む私たちも、やがてキリスト同様に生まれたからには、いつしか「死」を例外なく等しく迎えます。しかしながら聖書が私たちに語るのは、ただ悲しいだけではないということでもあります。その「死」の前後さえも私たちには大いなる、キリストによって与えられた望みがあるということでもあります。生まれたからには死んでしまう悲しみは、確かにあります。しかしその悲しみを突き抜けていく、慰めが復活されたキリストを通してたしかに今も「ある」ということでもあります。

アドベント第二週の最終日を迎えています。キリストもクリスマスがあつて十字架へとむかわれたのであります。いや、十字架の犠牲の死こそがクリスマスの究極の目的であつたのです。同様に私たちも生まれたという出来事があつて今、豊かな命を与えられております。「死」がいつやってくるかは誰もがわかりません。そういう有限な存在であるからこそ、今をきちんと生きていこう。なるべくならばヨセフよろしく「善良な正しい人」として歩みたい。そして何よりも「神の国を待ち望んで」、大いなる希望に満たされつつ、歩みを確かなものとしたいと願うのであります。

祈り アドベントの礼拝を感謝いたします。

イエス・キリストは私達の罪の赦しのため、人にまで降られ、犠牲をもって私達を生かし、生かされるのであります。クリスマス準備期間のこの時、私達それぞれの歩みを整え、今年も良きクリスマスをむかえさせてください。この祈りを、主の御名によって祈ります。アーメン。

主イエスに全てを委ね、従う歩みをする

東北学院榴ヶ岡高等学校

宗教主任

西間木

順

ヨハネによる福音書 八章一二節

イエスは再び言われた。「わたしは世の光である。わたしに従う者は暗闇の中を歩かず、命の光を持つ。」

東京から車で帰ってくるときの出来事です。東北自動車道に入った直後、豪雨に見舞われました。雷も降ってきました。雷も鳴り響いていました。豪雨のために、数メートル先が見えにくくなっていました。前を走る車がほとんど見えませんでした。運転しながら、私は、車線は間違っていないだろうか、この先はカーブになっていないだろうか、進むべき道は、間違っていないだろうか、そんな不安が募ってきました。運転するのが、とても怖くなりました。パーキングエリアに入って、この状況が、過ぎ去るのを待とうと思っても、パーキングエリアはまだ先でした。どうしよう、怖い。そんなときに、前の車のテールランプがかすかに見えたのです。テールランプだけですと、豪雨で見えにくいのですが、ありがたいことに、この

車はハザードランプもつけていたのです。この車についていこう。必死にこの車の後ろをついていったのです。無事に豪雨を抜けることができました。抜けたあとは、本当に安心したのです。

さて、私たちのこの世の歩みは、旅に例えることができます。この世の旅を続けていくと、突然豪雨に見舞われることがあります。大きな挫折をしたとき、誰かを傷つけたとき、あるいは誰かに傷つけられたとき、愛する者が突然亡くなったとき、苦難に襲われたと思ったときなど。そのような時はまるで豪雨に見舞われたかのようです。先が見えない不安や恐怖から、一歩前に進めなくなってしまう。自分の歩みを止めてしまいます。先に進まなければならぬのは、自分ではわかつています。それでも進むべき道は見えないし、どう歩めばいいのかわからない。誰も、自分のそばにいないのではないかと思ひ、孤独を感じるようになります。そして生きていくことに対して絶望を感じるようになります。

今日は与えられた聖句には主イエスの言葉、「わたしは世の光である。わたしに従う者は暗闇の中を歩かず、命の光を持つ」と書かれてありました。私たちの歩みの中で、豪雨に見舞われて、先に進めなくなっているときに、主イエスは、まるでテールランプやハザードランプをつけて走っている車のように、私たちの目の前を歩まれるのです。主イエスは「わたしを信頼し、わたしについてきなさい」と言ってくださっているのです。ですから、私たちは、主イエ

スの後を信頼して、ただついていけばいいのです。すべてを主イエスに委ねて歩めばいいのです。

旧約聖書から新約聖書まで一貫として、「わたしは必ずあなたと共にいる」という神が私たちに約束してくださっていることが書かれています。どのような時も、主イエスは私たちと共にいてくださるお方なのです。そして、主イエスは「私と一緒に歩もう」と私たちに呼びかけてくださっているのです。主イエスは、私たちを決して見捨てることなく、私たちのそばに来てくださり、時には慰め、時には励ましてくださるのです。私たちに生きる力を、生きる勇気を与えてくださるのです。私たちはこの主イエスにすべてを委ねてこの世の歩みをすればいいのです。

教会では明日からアドヴェントに入ります。新しい一年が始まります。主イエスが、暗闇を照らす真の光としてこの世に來られたことを心に留めながら、クリスマスまでの日々を過ごしていききたいものです。

〈祈り〉

父なる神

新しい命を与えてくださり、この学校へと招いてくださり感謝いたします。

あなたの招きに応え、共に礼拝をささげることができませんことを感謝いたします。

あなたが、「わたしは必ずあなたと共にいる」と約束してくださっているのですから、あなたを信頼し、あなたに全てを委ねて、あなたに従う歩みをすることが出来ますように。

この祈り 尊いわれらの主 イエス・キリストの御名によって祈ります。アーメン

人は「知らない」を知らない

宗教部長 野村 信

マルコによる福音書 四章二六―二九節

26 また、イエスは言われた。「神の国は次のようなものである。人が土に種を蒔いて、
27 夜昼、寝起きしているうちに、種は芽を出して成長するが、どうしてそうなるのか、
その人は知らない。 28 土はひとりでに実を結ばせるのであり、まず莖、次に穂、そして
その穂には豊かな実ができる。 29 実が熟すと、早速、鎌を入れる。收穫の 때가来たから
である。」

ただ今読みました聖書の中に、「その人は知らない」という言葉が出てきます。「どうしてそうなるのか、その人は知らない」と。今日は、この言葉をめぐって考えてみたいと思います。単刀直入に申しまして、現代社会では、「その人は知らない」ということを知らないのではないかと思えます。つまり、「その人は知らない」とは思わなくなつて、むしろ「その人は良く知っている」と思い込んでいる時代に私たちは生きています。

ここにマリー・ゴールドというキク科の花を持ってきました。水を時々やって、液肥をやれば、すくすくと成長します。秋にこの種を大地に撒けば、芽を出して、春には黄色とかオレンジの花を咲かすのです。実は、わたくしの家の庭で咲いている花は株分けできなくて、今日ここに持って来たのは、これはスーパーで買ってきたものなのです。百円です。

ところで、私たちは、この植物に値段を付けて、売買していますが、良く考えてみますと、大変なことをしています。値段の付けられるようなものではないのです。なぜなら、この植物が生きているという命は、私たちが造り出したものでもなく、値段をつけられるものでもなく、大地から生まれ、それを育て、増やしたのです。私たちはそれを育てることは出来ても、命そのものは、私たちがどんなに努力しても生み出すことはできません。

キリストが人々の前で、恐らく、どこにでもある、一つの種を取って手の平の上におき、「さあ見てくらん」と言つて、種を差し出して話を始められた時、人々は、いぶかしい目つきで、一体何を言うのだろうと思つたことでしょう。

キリストは、実にありふれた話を始めたのです。「人が種を播いて、夜昼、寝起きしている内に、種はひとりでに芽を出し、成長しますよね」と。そんなことは、キリストの時代においても、当たり前のごとく、なにを今さら、と思つたことでしょう。

しかし、キリストは、はっきりと指摘されるのです。「種をまく人も、それに肥料や水をや

る人がいても、なぜこの植物が成長していくのかは、誰にも分からない」と、言われます。そして、それから二千年たって、私たちは未だに、この種が成長して、大きく育っていく、「命」そのものについては、説明することが出来ません。

しかし、イエス・キリストは、「神の国は次のようなものである」と言って、この話をされたのです。すなわち、地上で、この種が芽を出し、植物として成長していく姿の中に、ある点で、神の国で起きることと共通していると言われるのです。

この種が成長して、大きく育っていく、命の働きそのものについては、人間には分からないのと同様に、神の国でなぜ新しい命が人間に付与され、人間が神の国で生きることになるのかも人間には分からないということです。

角度を変えて言えば、種を成長させてくださるのは神であり、私たちが死んだ後に新しい命を得て、新しい命によって生きること神のなさる働きである、ということです。

つまり、このたとえをとおして、主イエスは、私たちに命とその成長については、神に信頼するようにと教えられ、地上にあっては、与えられた命を大いに燃焼し、神をうやまい、人々に尽くすように諭され、天にあっては、新しい命を神から付与されて、おそらく私たちの想像できない新しい姿で神の国で生きることになると言われています。

このような植物も、動物も、そして人間も、生きていくすべてのものが、神の支配、神の力

によって生み出され、維持され、増やされているにも拘わらず、私たちはあまりにも動植物を大量に栽培して簡単に売買し、さらに人間も含めて一気に絶滅させることも出来るので、つい神の支配という、大前提を忘れてしまっています。

キリストの時代でも、植物の種は播けば育ち、動物たちはつがいにすれば子を生んで増え広がったので、あたりまえの話でした。しかし、あえて身近なことを取り上げて、キリストは、私たちには私たちの造り主がおられ、この造り主なる神の働きに信頼し、神に祈り、感謝することを忘れないようにと諭しておられるのです。

キリストは、他にも、種のとえを幾つか語られましたが、その中で、これに関連するたとえを思い起こします。すなわち、「一粒の麦は地に落ちて死ななければ一粒のままである。だが死ねば多くの実を結ぶ」とお語りになったのです。ヨハネ福音書の一二章二四節です。ここでは、主イエスが、御自身を一粒の種としてたとえておられます。いずれ十字架にかかって死ぬが、すなわち、死んで墓に葬られ、大地に身を横たえるが、しかし、続いて、新たに登場し、成長して、大きな実りを世界に広げると予告されているのです。

なるほど、植物の種は、小さくて、心もとないけれど、大地に蒔いて、芽を出すと、最初にあった種の姿とは全く違う形になって、大きく成長して行きます。そのように、キリストはまさに自らの未来を預言されたわけです。今日、世界の主となって、私たちを支え、私たちを執

り成し、私たちもまた種としていずれは大地に葬られるが、その後、キリストの故に、大きく成長するだろう、と予告されているのです。

私たちには、地上の世界においても天上の世界に関しても、分らないことはあるにしても、このキリストに信頼し、キリストの偉大なる支配とその豊かな恵みの中で、生き生きと、力強く成長していきたいと願います。

ちいさなかごに花を入れ

大学宗教授主任 阿久戸 義 愛

ルカによる福音書 一二章二二―二八

22 それから、イエスは弟子たちに言われた。「だから、言っておく。命のことで何を食べようか、体のことで何を着ようかと思ひ悩むな。23 命は食べ物よりも大切であり、体は衣服よりも大切だ。24 鳥のことを考えてみなさい。種も蒔かず、刈り入れもせず、納屋も倉も持たない。だが、神は鳥を養つてくださる。あなたがたは、鳥よりもどれほど価値があることか。25 あなたがたのうちのだれが、思ひ悩んだからといって、寿命をわずかでも延ばすことができようか。26 こんなごく小さな事さえできないのに、なぜ、ほかの事まで思ひ悩むのか。27 野原の花がどのように育つかを考えてみなさい。働きもせず紡ぎもしない。しかし、言っておく。栄華を極めたソロモンでさえ、この花の一つほどにも着飾ってはいなかった。28 今日野にあって、明日は炉に投げ込まれる草でさえ、神はこのように装ってくださる。まして、あなたがたにはなおさらのことである。信仰の薄い者たちよ。

キリスト教、特にアメリカでは、六月の第二日曜日を「花の日」そして「子どもの日」としています。日本では梅雨の時期で、スッキリ晴れる日が少ない季節ではありますが、六月は一年の中でも最もたくさん種類の花が咲く時期でもあります。そういう花の季節に、今から百年ほど前、アメリカのある教会の先生が、教会にたくさん花を飾り、それらの花と同じくらいかわいらしく、明るく元気な子ども達に対して、神様の祝福が豊かになるようにとお祈りしました。礼拝後にはその花を持って、子ども達と一緒に近隣の施設や病気の方々を訪問しました。子供達から綺麗な花を貰った人々は、暗い心も晴れて、とても明るい気持ちになったことでしょう。このエピソードが全米に広まり、今では全国的に、六月の第二週には、花を持って、大切な人やお世話になっている人達に花を届けるという「花の日」の習慣が広まりました。

さて、今日の聖書の箇所は、「野の百合、空の鳥」と呼ばれる、イエス・キリストの有名な話の一つです。主イエスは私達に、「思い悩むな」と何度も仰います。外国語の聖書では、「あなたがたの生活に心配をしてはならない」、「明日のことを今日考えるな」というような言葉になっています。私達は、生きていく以上、たくさん心配があります。試験や課題のこと、お金のこと、将来のこと、服装のこと、休みにどこに行こうかなど、楽しいことも面倒なことも含めて、考え事や悩みがあります。イエスはそれに対して「思い悩むな」と仰っています。

「心配してはならない」と言うのです。しかし、お金のことや食べ物のことなど、まったく心配しないわけにはいきません。これはどういうことなのでしょうか。

英語の聖書の中に、この箇所を“Don't be careful”と記しているものがあります。careful という英単語は誰でも知っている単語ですが、ケア（心配事・気がかりなこと）がフル（一杯）であるということ、つまり心配で心が一杯になっている状況です。イエスの言う“Don't be careful”とは、心を心配で一杯にしてしまっ*て*はいけない、ということ。イエスは、人間が当然すべきであるような、将来に対するちゃんとした計画をもつこと、用心深くあること、それを禁じているのではありません。そうではなく、思い煩いに身をすり減らし、不安におののくこと、それを禁じているのです。心配事や思い煩いは、人生から本当の喜びや感謝の心を取り去っていくものです。イエスは、思い煩いが不必要であることを、今日の聖書の箇所でも通りもの言い方で説明されています。イエスはこう言います。人間にいのちを与えてくださったのは神である。神は私たちに必要なものはすべてご存じで、それが本当に私達に必要なものならば必ずそれを与えてくださるだろう。だから、私達は何が欲しい、何が足りない、と言って慌てる必要はない。神様を信頼しなさい。そのようにイエスは言うのです。

イエスは、思い煩いは無益だと言われます。イエスは思いわずらう必要がないことを説くために、空を飛ぶ鳥と野に咲く花について語られます。

空を飛ぶ鳥は、畑に種を蒔いて食物を育てることもしないし、それを蓄えるということなど思いもしません。鳥はいわば、社会的に本当に不安定な生活を送っています。しかし、鳥の生活には思い煩いがありません。イエスが重要なこととして指摘されているのは、鳥は働かないということではなく、思い煩うことをしない、ということ。鳥は、人間のようには、そもそも予測することができない不安定な未来のために、あまりにも不安になって、無駄にものを蓄えようとはしません。鳥は、人間がするような、不可視な未来を見通そうとするあがきや、将来のために蓄えた物質の中に安心を見いだそうとすることがない。そういうことをイエスは指摘するのです。それでも神様は、思い煩うことなく空を飛ぶ鳥を養ってくれているのです。

また、野の花について語られます。これは以前の聖書では「野の百合」と書かれています。野の百合とは、今私達が想像するような白百合のような花ではなく、赤い芥子の花やアネモネの花のことを指したと言われています。これらの花は、パレスチナの丘にたった一日だけ、息を呑むような美しさで咲き、そして枯れていきます。枯れた後は、人々がそれを刈り取って乾かして、パンを焼くかまどの火をおこすのに使ったと言われます。イエスはこの野の花のことを考えてみなさいと仰います。花は自分で働いたりはしない。自分を必要以上に美しく見せるために着飾ろうともしない。けれども、どんなに素晴らしい王様、たとえばイスラエルで最も繁栄を極めていた時のソロモン王と比べても負けなくらい、いや勝っているほど、

このたった一日しか咲かない野の花は美しいのだ。この本当に小さな花を、弱く力の無い存在であるこの花を、神様はこんなにも大事に飾り、そして咲かせてくださるのです。

「だから」、イエスは言います。あの鳥、この花を見なさい。あなた達は、あの鳥や花よりもずっとすばらしい存在ではないか。鳥をこのように養い、花をこんなにも美しくしてください。神様が、人間に対しても深い配慮をしてくれないはずがあらうか。イエスは、思い煩うこと、不安や心配で心を一杯にしてしまうことは、神様を信頼していないからだ、と注意を与えています。信仰の薄い者達すなわち神を信頼しきれない人達に注意を与えています。神様は必ず私達を愛してください、私達に本当に必要なものを備えてくださる。それを信じるが故に、思い煩ってはいけません。

思い煩いをどうすればなくせるか。イエスは、神の国をもとめなさい、と言います。この言い方が難しいようであれば、その日その日の責任を果たして、あなたが出来ることを、どんなに小さくても良いからしながら、しっかりと生きなさい、ということ。神様があなたに求めておられることを、祈りの中でよく聞き、そして今日すべきことを今日、行いなさい、という事です。

今日歌った讚美歌（Ⅱ 26）は、「花の日」に歌われる歌です。

「ちいさなごに花を入れ、さびしい人にあげたなら、へやにかおり満ちあふれ、くらい胸

も晴れるでしょう。愛のわざは小さくても、神の御手が働いて、なやみのおおい世の人を、あかるく清くするでしょう」。

花をあげる、という行為は、本当に小さなものです。でも、そこには不思議な大きな力が働いて、なぜかその小さな花が世界を明るくするのです。私達は小さく弱い存在です。でも、どんなに小さくても、一人ひとりが、とても綺麗に笑って咲く花のような存在です。花は、小さくても、部屋を優しい香りで満たします。そして、人々の心を明るくするのです。私達は、そんな花になります。心の中に枯れることのない永遠の花を咲かせましょう。その花を、神様はきつと喜んでくれますから。

救い主がお生まれになった

大学宗教授主任 川 島 堅 二

ルカによる福音書 二章一〜一四節（二〇一八年十二月十七日 泉キャンパス礼拝）

「マリアは月が満ちて、初めての子を産み、布にくるんで飼葉桶に寝かせた」

（ルカによる福音書 二章六節）

「あなたがたは、布にくるまって飼葉桶の中に寝ている乳飲み子を見つけるであろう。これがあなたがたへのしるしである」

（ルカによる福音書 二章一二節）

これが今日、世界宗教として、世界に数ある宗教の中で二十億を超える最大の信者を擁するキリスト教の創始者イエス誕生について聖書が私たちに告げていることです。これはなんと不思議な記述でしょう。ここには偉大な宗教の教祖、創始者にはつきものの奇跡のかけらもありません。

たとえば同じ世界宗教である仏教の創始者、ゴータマ・シッダールタと比較してその違いは歴然としています。ゴータマの母マーヤは出産のため里帰りの旅行中にゴータマを産みます。

ルカによる福音書によれば、イエスの母マリアもベツレヘムへの旅の途中での出産ですので似ていますが、ゴータマの母マーヤは陣痛が始まると菩提樹の枝に片手を持たせかけると手の脇からゴータマを出産する。生まれたゴータマはすぐに直立歩行で七歩歩き、右手で天を、左手で地を指し「天上天下唯我独尊」と唱えたと言われます。

これと比較してキリスト教徒はどう思うでしょうか。赤ちゃんのお釈迦様が七歩歩いたというなら、イエス様には十二歩くらい歩いてもらって「神の国は近づいた。悔い改めて福音を信ぜよ」くらいは言って欲しかったと考えるでしょうか。そうではありません。「あなたがたは、布にくるまって飼いの葉桶の中に寝ている乳飲み子を見つけているであろう。これがあなたがたへのしるしである」というのです。

この何の変哲もない人間の誕生の営みが、すべての人に与えられる大きな喜び、私たちのため他ならぬ救い主誕生のしるしである。実はここにキリスト教の福音の本質が示されています。

総務省統計局による「世界統計二〇一八」によれば、今年一年で世界人口は八、三〇〇万人の増加です。単純計算で一分間に一五八人（死亡者の数を勘案すればもっと多いのですが）生まれていることとなります。イエス・キリストが私たち人間の出産と全く変わらない姿でお生まれになったということは、まさにこの日々世界中で起こっている人間の誕生の営みと全く同

じどころに下つてくださったということです。

同じことを初代教会の指導者パウロは次のように表現しています。

「キリストは神の身分でありながら、神と等しいものであることに固執しようとは思わず、かえって自分を無にしてしもべの身分になり、人間と同じものになりました。人間の姿で現れ、へりくだって、死に至るまで、それも十字架の死に至るまで従順でした」（フィリピの信徒への手紙 二章六、八節）。

皆さんは、自分のこの世での姿、人生、生き方があまりにも平凡で価値がないように感じて、生きる張り合いも意味も感じられなくなるようなときはないでしょうか。そのようなときにこのクリスマススの出来事を思い起こしてください。何か特別に選ばれた優れた人ではなく、何の変哲もない、平凡な人間の営みのただなかにイエス・キリストは来てくださった。それは平凡に見える私たちの日々の営みとともに神がおられるということです。このことを改めて自覚して、自分に与えられた生を感謝しつつ精一杯生きていきましょう。

さて、神が人間の姿、私たちと全く同じ姿でこの世にお生まれになった。それがクリスマススの出来事ですが、では、それは一体何のためでしょうか。この点についてはマタイによる福音書が明確に伝えています。

「マリヤは男の子を産む。その子をイエスと名付けなさい。この子は自分の民を罪から救う

からである。」(マタイによる福音書 一章二一節)

イエスはヘブライ語でヨシユア、その意味は「ヤーウエ(主なる神)は救い」です。ではどういう意味の救いなのか。「罪から救う」という。マタイ福音書は「罪」(ハマルティア)という言葉をも、「負債」「借金」を意味するオフエイレーマという言葉と互換可能であるという解釈に基づき、例えば「主の祈り」の「私たちの罪をおゆるし下さい」を、ルカ福音書と異なり「私たちの負債(オフエイレーマ)をおゆるし下さい」と言い換えています。「罪」ということや抽象的でわかりにくいですが、「負債」「借金」というと非常にリアルでイメージしやすいです。「その子をイエスと名付けなさい。この子は自分の民を負債、借金から解放するからです」というのです。

では、この負債とはどういうことなのでしょう。イエス・キリストは次のようなたとえ話によって、私たちが負う負債には二通りあると教えています。ある王様が家来たちに貸した金の返済をしようとしたところ、ある家来には一万タラントンの借金があることが分かったので、返済を求めたが、返せないという。そこで家財道具一切を、さらには妻も子も自分自身も奴隷として売り渡して返済せよと命じた。その家来は王様の前にひれ伏して「どうかもう少し待ってください」と哀願したところ、王様はこの家来を憐れに思い彼を赦し、その借金を帳消しにしてやった。ところがその家来は、その後、自分に百デナリオンの借金をしている友人に

出会うと、友人に厳しく返済を求め、友人の「もう少し待ってくれ」という願いも聞かず、訴えて牢に入れてしまった。(マタイ福音書 一八章二一節以下)

このたとえ話には二通りの借金が語られています。王様(神さま)との関係における一万タラントンの借金と、仲間(同じ人間同士)との関係における百デナリオンの借金です。人間同士で貸し借りする百デナリオンは、これは今日の通貨に換算すれば数百万円です。私たちもこのような借金であれば身に覚えがあります。奨学金、教育ローン、車や住宅ローンのたぐいでも、ここには神さまの出る幕はありません。このような負債はそれなりに大変ではあるけれども、自分の人生の中で、自分の働きで返済できる、解決できるといふ見込みのもとになされる貸し借りだからです。罪にもそういう罪がある。自分の努力によって解決処理できる罪です。

しかし、私たちが神さまとの関係において負っている負債は一万タラントンの、これはけた違いの借金です。マタイ福音書の読者であった当時のユダヤ人たちにとって「二万タラントンの」という金額は辛い因縁を思い起こさせる数字でした。旧約聖書にエステル記という書物があります。それはペルシャ王クセルクスがユダヤ人を含む中近東一帯を支配していた時代の記録ですが、そのクセルクス王の寵愛を得て、他の大臣に勝る地位にのし上がったハマンという高官がユダヤ民族を絶滅するという恐るべき策略を実施するために用意した資金が「一万タラント」だったからです。

このような国家予算規模の金額が「一ワタラントン」であり、それは一般人が自分の人生において手にできるような金額ではない、途方もない額なのです。神さまとの関係において私たちはそれほど負債を追っているという認識に目を開かれること、それが信仰の出発点です。私たちが自分の力ではいかようにも解決できない罪、神さまとの関係における破れを修復するためにイエス・キリストは来られた。このことを心に深く刻みクリスマスの時を過ぎしましう。

神の似像

大学宗教授主任 北 博

創世記 一章二七節

神は御自分にかたどって人を創造された。神にかたどって創造された。男と女に創造された。

本日お読みしたのは、人間の本質を表していると思われる「神の似像」ないし「神の似姿」、あるいはラテン語で「イマゴ・デイ」と呼ばれる概念を含む、古来非常に重要視されてきた個所です。半面、ダーウインの『種の起源』の刊行後、この個所をめぐって進化論との関連で本質論を離れた水掛け論的な議論が繰り返されるといって、不幸な歴史を辿った個所でもありません。そこで今日は改めてこの個所から、人間の本质について再考してみたいと思います。

創世記九章六節では人の命を奪うという行為がいかに重大な罪かということに言及していますが、その理由として今日お読みした個所から「神の似像」を表す文言を引用しています。そうすると、「神の似像」とは人間の尊厳のことであり、それゆえ人の命を奪うことの代償は自

分の命をもつてするしかない、それほど人の命はかけがえないものである、ということなのだろうと思います。そしてそれが、「十戒」の中の出エジプト記二〇章一三節で殺人を戒めていることの根拠でもあるのでしょうか。

ただ、「神の似像」については、殺人の禁止の根拠ということだけでは言い尽くされないものがあると思います。新約聖書のマタイによる福音書五章二一節以下では、イエスが山上の説教の中でこう言います。

「あなたがたも聞いておるとおり、昔の人は『殺すな。人を殺した者は裁きを受ける』と命じられている。しかし、わたしは言っておく。兄弟に腹を立てる者はだれでも裁きを受ける。兄弟に『ばか』と言う者は、最高法院に引き渡され、『愚か者』と言う者は、火の地獄に投げ込まれる。」

イエスは律法破りをした、と言われます。またキリスト教徒の中には、「イエス・キリストの十字架の犠牲の死と復活によって、旧約律法は無効になった」と考える人もいます。でも、果たしてそうなのでしょうか。通常「律法」と訳されるヘブライ語の「トーラー」の本来の意味は、平たく言えば「教え」です。それは命令ではなくて、「命に至る道の道しるべ」とでも呼ぶべきものなのです。それならイエスは、先ほどから問題にしているトーラーの指し示す方向を正しく理解していた、と言えるのではないのでしょうか。つまり、人を殺してはならないの

は当然ですが、人殺しさえしなければいいと言うことではなく、人を侮辱しその人の心を傷つけることも神の似像としての人間の尊厳を傷つけることであって、それは許されない行為である、ということです。

つい先日、私は「マリオくAIのゆくえ」というテレビドラマを観て、シヨックを受けました。SFドラマですが、いくら未来でもそんな舞台設定が現実になる日が来るとは思えなかったのと、最後がかなり凄惨な幕切れだったので、物語の詳細をここで話すのははばかられます。ただ、特に印象に残っているのは、人間の肉体を得たAIが、当初ひどいじめを受けていて自殺をしようとしていた少年に、「なぜ人を殺してはいけないのですか」と聞く場面です。「それは法律で禁じられているからです」と論理的に畳みかけるAIに対して少年は、「考え込みながら「嫌な気がするから」と答えます。ですが、このAIには理解できない「嫌な気持ち」の正体は何で、それは一体どこから来るのでしょうか。

話は少し飛びますが、私は最近カトリックの雑誌の依頼を受けて、「旧約における罪と赦し」をテーマにした寄稿をしました（注…『福音宣教』二〇一八年八、九月合併号）。このテーマを示された時、実は私は少々悩みました。新約聖書ならパウロがかなり理路整然とこの問題を論じていますが、旧約聖書のヘブライ語には実は「罪」と訳せる語がいくつもあって、しかもそれぞれ概念的に違います。それらを通底するものは何だろうと考えた末、あることに思い当た

りました。それらが「罪」と訳せるのは、人間が神に対して照準が合っていない、真つすぐ神に向き合っていないスタンスを取る場合なのです。「的外れ」にせよ「逸脱」にせよ、きちんと神の方を向いていないことによって人間は悪い行いに走ってしまい、その結果災いを招く、というパターンが旧約では繰り返されます。

少年の言う「嫌な気持ち」は、神に照準が合っていないこと、の感覺的表現なのではないでしょうか。アウグスティヌスの『告白録』の中に出て来る「私達の心はあなたの中に憩うまでは安らぎを得ません」という有名な言葉は、まさにこのことを言い表しているのだらうと思います。この感覺は、キリスト教の信者であるなしに関わらず、無神論者も含め、誰にでも起る普遍的なものだと思います。

それでは、凶悪犯罪を繰り返す人やいじめを続ける人が「良心の呵責を全く感じない」と言い放った、という類のことをたまに耳にすることがありますが、それはどういうことなのでしょう。もしそれが本心だとするなら、それは何かの強い感情に支配され、心が覆われてしまつて、その人が本来持っていた人間性を見失っているためではないでしょうか。その感情の支配から解放され、覆われていた人間の心が取り戻されれば、どんな人にもこの「嫌な気持ち」の感覺が再び現れるはずですよ。

「神の似像」の問題に戻ります。ユダヤ人思想家のマルティン・ブーバーは、このことに関

して興味深いことを言っています。ブーバーは、「神の熱情」という概念を非常に重視します。「熱情」は、旧約聖書の重要な場面によく出て来る語で、以前はよく「妬み」と訳されていました。先程の十戒の中にも、神が「わたしは熱情の神である」と自らを表現する箇所があります。

ブーバーは、「神の熱情」とは人間の課題としての「神の似像性」である、と言います。彼によれば、「神の熱情」は啓示の源泉であり、神の側から溢れ出て人間を圧倒する「熱情」の力によって人間は「神の似像」としての自分に目覚め、真の人間となるのです。それをレヴィナス的な言い方に言い換えるなら、「神の熱情」は完結した全体性としての世界の外側から到来する力、まさに秘儀的な「神の顔」であって、この「出会い」によって人間は、自分が「神の似像」であることの意味を問われ、更にそのような者としてどう生きるかという問いを突きつけられることになるのです。

現在世界では、民族、宗教、人種の違いによる差別や迫害、深刻な人権侵害などが横行していると伝えられます。また日本では、学校でのいじめや職場での様々なハラスメントが問題となっています。これは、多くの人々がストレスや挫折感などによって、嫉妬や憎悪の感情に心が支配され、覆われてしまって、「神の似像」としての自分を見失ってしまっているからではないのでしょうか。今の自分の生き方が本当に神の方向に照準が合っているかどうか、今一度確

認
し
て
み
た
い
も
の
で
す
。

心の鍵の用い方

大学宗教授主任 木村純二

マタイによる福音書 六章一九―二一節

「¹⁹あなたがたは地上に富を積んではならない。そこでは、虫が食ったり、さび付いたりするし、また、盗人が忍び込んで盗み出したりする。²⁰富は、天に積みなさい。そこでは、虫が食うことも、さび付くこともなく、また、盗人が忍び込むことも盗み出すこともない。²¹あなたの富のあるところに、あなたの心もあるのだ。」

私は、この四月に文学部総合人文学科の教員として東北学院大学に着任し、同時に宗教部のメンバーとして礼拝を担当させていただいております。研究室は、この土樋キャンパスにありまして、ホーイ記念館の五階の新しくきれいな部屋を使わせていただいております、大変ありがとうございます。おっしゃる通り、

四月に着任した折、施設部の方から「研究室の鍵です」と言ってカードをお渡しいただきました。今ここにありますが、このカードを電車のスイカのように所定の場所にかざして、ピッ

とやるとロックが解除されるようになっていきます。それで、初めて研究室に入る時にピッとやってドアを開けようとしたのですが、ノブが固定されたまま動きません。おかしいなと思って、もう一度ピッとやると今度は無事に開きました。何だろうと思いつながらも、とりあえず部屋に入れたので、あまり気に留めずにいたのですが、次にまた部屋に入る時に、やはり一度目では開かず、二回ピッとやると開きます。セキュリティのために二回やるようになっていんだろうか、などと考えていて、数日後に、はたと気付きました。このカードは、まず部屋を出るときにピッとやってロックをして、外出から戻ってきて部屋に入る時にまたピッとやってロックを解除するシステムになっていたのです。私はこれまで、カードキーというものをビジネスホテルでしか使ったことがなく、ホテルではたいいオートロックと言って、ドアを閉めると自動的に鍵が掛かり、部屋に入る時にだけカードでピッとやって開けるようになっていました。それで、カードキーということはつまりオートロックシステムなんだと自分で勝手に思い込んでしまっていたために、うまくいかなかったわけです。

ということはどういうことかと言いますと、私は、部屋を出る時には鍵を掛けずに開けっ放しにしたまま外出していて、戻ってきて、いざ自分が入ろうという時にピッと鍵を掛けて、自分で自分を入れなくしていたわけなのです。

そのことに気付いたときに、私は、これはただ部屋の鍵のことだけでなく、自分の人生をそ

のまま映し出しているのではないかと思いましたが。どういふことかと言いますと、鍵というのは、盗まれてはいけない大事なものがあから掛けるわけです。しかし、本当に守るべき富はいったい何なのかということが問題です。先ほどお読みした聖書箇所では、虫が食ったり、さび付いたり、盗まれたりするような「地上の富」ではなく、「天に富を積みなさい」と教えています。では、「天に富を積む」ためにはどうすればよいのでしょうか。端的に言えば、それは「神の教えに従う」といふことになるかと思えます。

「最も大切な教えは何か？」と尋ねられて、イエスは「心を尽くし、精神を尽くし、思いを尽くして、あなたの神である主を愛しなさい」といふ掟と、「隣人を自分のように愛しなさい」といふ掟の二つを挙げました。今日の聖書箇所の直前、マタイ六章の前半では、「祈ったり断食したりする時に人に見られないようにしなさい」といふことをイエスが語っています。これは、「人に見られていなくても、天におられる父なる神が見ていて下さる」といふことを教えており、「心を尽くして神を愛する」ことの具体的なあり方を示しているかと思えます。私たちは、「あの人は熱心にお祈りをしている」といった他人からの評価や世間の評判をつい求めてしまうのですが、それもやはり、すぐに滅びてしまう地上の富に過ぎません。あてにならない他人からの評価ではなく、神様が見ていて下さることを本当の富と知り、それを喜びなさいといふことを教えているのかと思えます。

もう一つの大切な掟である隣人愛も同じです。マタイの二五章では、来たるべき再臨の時、イエスは神の国に入ることを認められた人たちに対して、「お前たちは、わたしが飢えていたときに食べさせ、のどが渴いていたときに飲ませ、旅をしていたときに宿を貸し、裸のときに着せ、病氣のときに見舞い、牢にいたときに訪ねてくれた」と語りかけ、その人たちが、「いつ私たちがそのようなことをしたでしょうか？」と尋ねると、「最も小さい者の一人にしたのは、私にしてくれたことなのである」とお答えになると記されています。辛く困難な状況にある人に出会ったとき、手を差し伸べることができれば、神様がちゃんとそれを見て覚えていて下さる、それこそが天に富を積むことだということになるかと思えます。

さて、私自身はどうかと言いますと、一信仰者として、心を尽くして神を愛し、また人を愛することが天に富を積むことだと知っているはずなのに、気が付くといつもその富を大切にすることを忘れてしまっています。世間的なことや地上のことに気を取られて神様のことをないがしろにしたり、困っている人がいても、自分がやらなくてもよいような理由を何か作って、見て見ない振りをしてしまったり、自分の個人的な欲望を優先したり、恥ずかしながら、そのようなことばかりです。ちょうど先ほどの研究室のカードキーと同じで、本当に大切にすべき富を開けっ放しでほったらかしておいて、いざ自分がそこに足を踏み入れるべき時には自分で鍵を掛けて閉ざしてしまう。カードキーの愚かな失敗を通じて、人生そのものの愚かな過ちに

神様が気付かせて下さったのだと思います。心の鍵は、うつろい滅びゆくようなこの世の富を頑なに守るために掛けるのではなく、神の教えを堅く守るために掛ける、そういう心の鍵の正しい用い方といったものを学ぶ機会となりました。

みなさんは、いかがでしょうか？ イエスは、「あなたの富のあるところに、あなたの心もあるのだ」と語っています。これはつまり、あなたの心はいったい何に向かっていているのか、何を大切にして生きているのか、それは本当に大切にすることに値するものなのか、そうしたことを私たちに問い掛けているわけです。人生で本当に大切にすべきものは何か、それを心と行いをもって本当に大切にすることができているか、日々の生活の中で自分自身点検できるようにしたいと思います。

「神の愛」ってこんなにマジヤバイ!

大学宗教授主任 原田浩司

ルカによる福音書 一五章一〜七節

1 徴税人や罪人が皆、話を聞こうとしてイエスに近寄って来た。2 すると、ファリサイ派の人々や律法学者たちは、「この人は罪人たちを迎えて、食事まで一緒にしている」と不平を言いだした。3 そこで、イエスは次のたとえを話された。4 「あなたがたの中に、百匹の羊を持つている人がいて、その一匹を見失ったとすれば、九十九匹を野原に残して、見失った一匹を見つけ出すまで捜し回らないだろうか。5 そして、見つけたら、喜んでその羊を担いで、6 家に帰り、友達や近所の人々を呼び集めて、『見失った羊を見つけたので、一緒に喜んでください』と言うであろう。7 言っておくが、このように、悔い改める一人の罪人については、悔い改める必要のない九十九人の正しい人についてよりも大きな喜びが天にある。」

数々のたとえ話の中でも、迷い出た一匹の羊を必死に捜す羊飼いの姿を物語るこの箇所は、

とてもよく知られるたとえ話です。その一方で、どうにも腑に落ちないという人も多いたとえ話かもしれません。この物語が何をたとえた話なのかという、この話の急所がつかめないと、本当につかみどころのない腑に落ちない話になってしまいます。この箇所だけをただ素直に読めば、「九九匹を置き去りにして一匹を探すなんて、リスクマネージメント（危機管理）がまったくできていないではないか！ 羊飼いとしては失格じゃないか！」と話の最初から躓いてしまいます。

イエス・キリストがたとえ話をする時というのは、弟子や群衆に分かりづらいことを伝えようとする時です。この迷い出た一匹の羊の譬えで、イエス・キリストがわたしたちに伝えようとしているのは、会社経営のノウハウや経営のリスクマネージメントではありません。罪人を迎え入れる〈神の愛〉とはどのようなものであるのかを分かりやすくしたたとえ話です。今日のここで問題となっているのは、「愛」です。このたとえ話に、どのような愛のカタチ、愛の姿があるのかを、改めて聖書の言葉から確認してみましよう。

最初に気づかされるのは、四節「あなたがたの中に、百匹の羊を持っている人がいて、その一匹を見失った」とあることです。この羊飼いは「その一匹を見失った」ことにまず気づいたのです。羊は一〇〇匹もいます。わたしも受講者一〇〇人規模の教室で講義をしています。正直申し上げて、一週間に一度しか教室でしか会うことのないその講義の中で「あっ、〇〇さ

んがいない」とはどうてい気づけません。でも、この羊飼いは気づくのです。毎日顔を合わせ、いつも近くににいるからでしょう。「あつ、あの羊がいない」と。この羊飼いは一〇〇匹の羊、それぞれに名前を付けて、名前で呼んでいたかもしれない。ですから一〇〇匹の羊の中にあの一匹の羊がいないことに気付いている。それは、この羊飼いが一匹一匹をしつかりと見分けられるくらいに、一匹一匹に関心を寄せていればこそです。だから気付けるのです。この気づきが、一匹一匹、一人ひとりに注ぐ関心が、神の愛です。いつも近くにいて下さるからこそ、この気づきに、最初の愛に気づかされます。

そして、羊飼いはいなくなったその一匹の羊を捜しに行きます。もう一度四節を確認すると、「九九匹を野原に残して、見失った一匹を見つけ出すまで捜し回らないだろうか」と、イエス・キリストは聴き手に訴えかけています。「見失った一匹を見つけ出すまで当然捜し回るでしょ」という具合です。しかし、わたしたちは思います。「え、ちょっとそれはできません」。羊飼いとして一〇〇匹に対して平等に責任がありますから、九九匹を野原に残して一匹を捜しになんかいきません。目を離れたときに、九九匹に何かあったらどうするんですか!?!と。ですから、最初にも申し上げた通り、会社経営のリスクマネージメントでは、一匹を捜しに行くのは不正解ですし、間違いです。でも、これは神の愛をたとえています。神の愛とはなにか、一匹と九九匹。ただの数字に置き換えれば、九九を採ります。しかし、神は、一人や一

匹というように、わたしたちを数に置き換える方ではない。他にかけがえのない「あなた」として、わたしたちを見つめていて下さる、このわたしを捜している。確かに、愛するというのは、一人をかけがえのない存在とすることです。誰しもがもつ若き日の初恋の経験を考えれば、同じ年齢の男性、女性は何人もいましたが、あの一人の、かけがえのないあの人に恋をした。他に数いる男性、女性では代わりにならない、そういうかけがえのない存在です。数値に置き換えられる「物」であれば、失えば、他のもので代用できますが、神の愛は、わたしたちを他の人で代用できない「かけがえのない存在」としてくださる愛なのです。

次に、気づかされる愛は、まったくもって打算のない愛です。この愛には見返りの計算がありません。九九匹を野原に残して、迷い出た一匹の羊を捜しに出たら、一匹の羊を捜しに行っているうちに、その九九匹が野獣に襲われて食べられてしまうかもしれない、と皆さんは計算できます。しかし、神の愛には、私たちがするような計算がありません。例えば、母親が生まれたばかりのわが子を愛する時、そこには全く打算など働いていません。損得勘定はありません。私たち人間の愛は、時に打算的で、自分の利益にならないと分かると、愛することを止めてしまう、そんな「安っぽい」愛があります。打算的で利己的な愛は、愛と呼べるのでしょうか。この譬えでイエス・キリストが語る神の愛は「打算のない愛」です。

更に気づく、愛の特徴は、羊飼いは失った一匹の羊を見つけるまで捜すのです。ちょっと、

少し捜したけど、見つからなかったから探すのをあきらめてしまふのではない。いつまで捜すのか。見つかるまであきらめずに捜す、という徹底ぶりです。「あきらめない、徹底した愛」です。ですから、そこには自ずと忍耐が求められます。八月に二歳の男の子が行方不明になった出来事があり、三日後にスーパーパーボランティアの小島さんによって見つけられたニュースは世間の関心の的になりました。このスーパーパーボランティア小島さんばかりに関心が向きますが、愛するわが子を見失った両親はそれこそ必死に、血眼になって捜し続けたと思います。そのようにして、あきらめない忍耐をもって、神はあなたを捜している。それが神の愛です。

次に、この羊飼いはようやく見つけ出すと、この羊飼いは羊の首に縄を結んでグイッと引張って群れに連れ戻すかと思いきや、この羊を担ぐのです。この羊を背負うのです。愛するといふのは、その相手を背負うことです。寂しさ、不安、悲しみ、喜び、この一匹の羊が抱えるものを、羊飼いは背負うのです。あなたの苦しみを私も背負う、この私が背負う。それが神の愛です。このたとえ話を語られたイエス・キリストは、わたしたちの罪を背負い、自ら十字架を背負って、ゴルゴタの丘の上に進んでいかれました。神の愛は、私たちを背負ってくださいなのです。

そして、この羊飼いは、見つけた羊を背負って大喜びで帰って来ました。すると、友達や近所の人たちを呼び集めて、「いなくなった羊を見つけてましたから、一緒に喜んでください」と

言っています。喜びを分かち合おうとしています。ここで気づかされるのは、愛とは分かち合うものだとということです。神の愛は、自分一人で独り占めにするものではない、皆と分かち合えます。だからこそ、キリストの福音に生きるわたしたちは、キリストの教会は伝道をするのです。

神の愛を分かち合うために、キリスト教は昔も今もこれからも、福音を伝道するのです。この東北学院大学も、神の愛を皆さんと分かち合うのです。ここに、天においても大きな喜びがあります。

神を結び目とすることへの招き

大学宗教授主任 藤原佐和子

レビ記 一九章三三〜三四節

33 寄留者があなたの土地に共に住んでいながら、彼を虐げてはならない。34 あなたたちのもとに寄留する者をあなたたちのうちの土地に生まれた者同様に扱い、自分自身のように愛しなさい。なぜなら、あなたたちもエジプトの国においては寄留者であったからである。わたしはあなたたちの神、主である。

二〇一八年、女子テニスの大坂なおみ選手がグランドスラムを制覇したことが話題になりました。私は彼女をテニスが強くてかっこいいなあ、それにインタビュではチャーミングで素敵だなあと思っています。彼女が試合中にイラツときたときに、上を向いてむりやり笑顔を作って怒りを乗りこなすところなども好きなのですが、彼女をめぐる世の中の声については気になるものもあります。

一つは、応援する人たちや報道の人たちが「日本人初の快挙」「日本の誇り」と祝っている

ときに感じるなんとなしの違和感です。日本人のお母さんとハイチ系アメリカ人のお父さんを持つ大坂なおみ選手は、日本だけでなく、ハイチ、アメリカにもルーツがあります。もちろん、彼女は日本の選手として国際試合に出場しているので「日本のテニス選手」です。でもなぜ、日本ばかりを強調しなければならないのかなあ、と感じるときがあるのです。もう一つは、私がものすごく問題視していることです。一方では、「大坂なおみは日本人じゃない」というきわめて差別的なバッシングがあったのをご存知でしょうか。彼女は日本、ハイチ、アメリカにルーツがある「日本のテニス選手」です。にもかかわらず、なぜ彼女は不当な非難に晒されなければならないのでしょうか。

俳優でタレントの副島淳（でんじまじゅん）さんは、アフリカ系アメリカ人と日本人の親を持っています。身長は一九五センチ（アフロを入れると二一五センチ）、見た目はいわゆる「外国人」ですが、英語はわからず、二年前まで海外に行ったこともなかったそうです。副島さんは、大坂選手へのバッシングについての新聞の取材でこんな風に答えています。行きつけの居酒屋さんに行ったところ、ある男性客が「正直、日本人初で優勝するなら、本当の日本人の方がよかった」とか、「一〇〇%日本人ではないので手放しで喜べない」などと話すのを聞いて、さびしさを覚えたといいました。

人口動態統計によると、去年、日本で生まれた子どもの約二%は、親のどちらかが日本以

外の国籍です。外国にルーツを持つ子どもは、一〇〇万人を超えており、国籍にかかわらず「外国にルーツを持つ人々」の場合には四〇〇万人以上います。さらに法務省によれば、今年、在留資格を持っている外国籍の人は、国内に二五六万一、八四八人いて、総人口に占める割合は初めて二%を超えました。このように、ますます色々な人たちが共に生きる社会において、いまだにいわゆる「日本人」という概念を、均質的で固定的なものと思ったり、少しでも違う要素があれば排除してよいとみなしたりするような冷たい空気が存在していることを、私はとても危険なことだと感じています。

日本社会はいわゆる「外国人」、なかでも在留資格を持たない不法滞在の人たちに対してとさら冷酷です。不法滞在者を収容する施設は、全国に一七ヶ所あるのですが、なかには五年を超えて収容され続ける人もいます。二〇一〇年には、東京入国管理局が強制送還しようとしたガーナ国籍の男性が死亡しました。猿ぐつわや結束バンドで拘束され、前かがみの姿勢を取らされていたために、離陸前の飛行機の中で亡くなってしまったのです。今年四月には、茨城県牛久市郊外にある収容施設（東日本入国管理センター）で、約九ヶ月にわたって収容されていた三十一歳のインド人男性がシャワー室で首をつって自死しました。「日本人ではないから」「外国人だから」「不法滞在者だから」といって、このような非人間的な扱いを受けてよいはずがありません。このような収容施設にいる人たちの中にはもちろん、「難民」「避難民」と呼ば

れる人たちも含まれます。

現在、世界には二億四、四〇〇万人の移民がいて、難民、避難民は六、八五〇万人います。数字だけでは現実味がないかもしれませんが、難民、避難民のうち、五三%が子どもであり、その多くが家族と離ればなれになっていると聞けば、ことの重大さが分かるに違いありません。レビ記にこんな言葉があります。「寄留者があなたの土地に共に住んでいるなら、虐げてはならない。あなたたちのもとに寄留する者をあなたたちのうちの土地に生まれた者同様に扱い、自分自身のように愛しなさい。なぜなら、あなたたちもエジプトの国においては寄留者だったからである」。そういえばあのイエスも、生まれて間もない頃にエジプトに避難していたことがありますね。マリアとヨセフはヘロデ王の迫害から逃れるために、幼子イエスを連れてエジプトに寄留したのです。イエスの家族のことを「聖家族」といいますが、「聖家族」は避難民だったのです。

もっと遡ってみると、イスラエル民族の父祖アブラハムも、神から召し出されて行き先の分らない旅に出た寄留者でした。雨宮慧あめみやさとし神父さまによると、そのときの言葉をヘブライ語の語順に忠実に訳すところなるそうです。「行きなさい、あなたのために、あなたの地から、あなたの親族から、あなたの父の家から、私が示す地に向けて」。驚くべきことに、神はこの世の地縁や血縁を結び目とする共同体から、アブラムを離脱させようとしているのです。地縁

や血縁は、そこから少しでも外れる人たちに對する不安感を呼び起こし、相手を「未知の人」「何をするかわからない人」だと思ひ込ませます。地縁や血縁に對する過度のこだわりは、人間としての健全さのために必要な「神への畏れ」を私たちから奪うのです。神父さまの説明によれば、神は、私たちを地縁や血縁からなる共同体から離脱させ、「神が示す地」に向かう共同体、「神を結び目とする」共同体へと向かわせようとしているというのです。

ラジオを手放せない私でさえ、あるときを境に、日本スゴイ系のテレビ番組が増えてきたことに気付いています。ですが、良いところ、きれいなところ、自慢できるところだけを見つめることは、果たしてほんとうに愛なのでしょうか。

宗教の本来の役割は、「視野の狭さに挑戦すること」だといえます。日本宣教会で外国人差別の問題について講演された松浦悟郎神父さまは、他者を排除したり、問題をなかつたことにしたり、隠したりしていると、人間はだんだんと心が痛まなくなるのだと言っておられました。それは、部屋の中にゴミ袋があつても、見ない人と一緒だそうです。「ゴミ袋、ありますよね？」と言われても、「ない」と断言できてしまう。でも、部屋の中を動き回っていても、不思議とゴミ袋にはぶつからない。避けて通ることができると、なぜかという、本当は「ある」ということを知っているからです。

ますます多様な人たちと共に生きる今日、私たちは、「地元の間かどうか」「出身地はどこ

か」「いわゆる日本人かどうか」などのこの世の基準による視野の狭さに挑戦し、神を結び目として共に生きるように、神から招かれているのではないでしょうか。

心を欺く

大学宗教主任 吉田 新

ヤコブの手紙 一章二二～二七節

22 御言葉を行う人になりなさい。自分を欺いて、聞くだけで終わる者になってはいけません。23 御言葉を聞くだけで行わない者がいれば、その人は生まれつきの顔を鏡に映して眺める人に似ています。24 鏡に映った自分の姿を眺めても、立ち去ると、それがどのようなのであったか、すぐに忘れてしまいます。25 しかし、自由をもたらず完全な律法を一心に見つめ、これを守る人は、聞いて忘れてしまう人ではなく、行う人です。このよ
うな人は、その行いによって幸せになります。26 自分は信心深い者だと思っても、舌を制することができず、自分の心を欺くならば、そのような人の信心は無意味です。27 み
なしごや、やもめが困っているときに世話をし、世の汚れに染まらないように自分を守ること、これこそ父である神の御前に清く汚れない信心です。

本日、お読みしました「ヤコブの手紙」には、キリスト教の信仰を持って生きる人々に対し

て、どのように生きるべきかを教える言葉が記されています。信仰を持たない者にあまり関係のない言葉のように聞こえますが、しかし、信仰を持たない人々に対しても人として生きるに際して大切な教えがそこには残されていると思います。とても印象深い次のような言葉をそこに見出します。

「自分は信心深い者だと思っても、舌を制することができず、自分の心を欺くならば、そのような人の信心は無意味です。」

この箇所は、信仰を持っている人に対して、その宗教的な態度を戒める勧告です。宗教的な立派な行いをしたり、熱心に祈ったり、神を高らかに讃美することを口にしても、その人が別な場所で人の悪口や陰口をたたくならば、その人の信仰というのは実に虚しいものに違いないという意味です。信仰深い心を持っていると言いなから、自分の舌を制御できず、平気でそれを裏切る人のことを指しています。そのような人の信心は見せかけのものであり、無意味なものです。本当の信心とは何か、信仰を持つて生きるとは何かを厳しく問いかける箇所です。

私がここでとても気になるのは、「自分の心を欺く」という表現です。以前、私はこの言葉に自分の生き方を戒められた経験があります。信仰を持つ、持たないに関わらず、聖書はしば

しば人間の本質的な問題を突き付ける言葉を私たちに投げかけます。私たちは時に自分自身の心に対して嘘をつき、だます存在であるということです。「まさか、自分は自身の心に忠実だ」、「自分に対して嘘をついたことはこれまでありません」と自信を持って言える方はどれほどいるでしょうか。別の視点からこの言葉を深めていきたいと思えます。

太宰治という作家をご存じでしょうか。教科書などに彼の作品が掲載されていますので、よく知っている人は多いと思います。彼の代表作の一つに『人間失格』という小説があります。この小説の主人公は人間関係があまりうまくいかず、周囲に溶け込むためにわざと失態を犯して周囲の笑いを取るような人物です。彼は周囲の人々とのコミュニケーションを円滑に進めるように、人前で自分を演じる、つまり道化、ピエロになることを選びます。『人間失格』に次のような主人公の独白があります。

「自分は隣人と、ほとんど会話が出来ません。何を、どう言ったらいいのか、わからないのです。そこで考え出したのは、道化でした。(略)自分は、人間を極度に恐れているが、それでいて、人間を、どうしても思い切れなかったらしいのです。そうして自分は、この道化の一線です。わずかに人間につながる事が出来たのです。おもてでは、絶えず笑顔をつくりながら

も、内心は必死の、それこそ千番に一番の兼ね合いとでもいふべき危機一髪、油汗流してのサーヴィスでした。」

私はこの小説を読んだ時、この主人公がまるで自分であるかのように思えてしまいました。私も自分を演じていたからです。私も道化だったのです。

皆さんは自分を演じることはありませんか。私は皆さんと同じの年代の時、よく自分を演じていました。自分の心を欺いていました。具体的にいえば、友だちと呼んでいる人たちの間で。当時の私は彼らと話をするのが本当は苦痛でした。高校や大学に入って、同じクラスや学科の人と仲良くなって、一緒に授業を出たり、休み時間におしゃべりしたり、学食でご飯を食べたり、時には遊びに行き、カラオケに行ったりして、それなりに楽しい時を過ごしたとしても、家に帰り、自分の部屋に一人になるととてもホツとしました。

実は苦痛だったのです。周りの人間との空気を乱さないように、言葉を選んで話をしたり、友だちが傷つくようなことを言わないように、場違いのことを言わないように慎重になる。つまらない奴だと思われぬように、わざとおどけてみたり、受け狙いのことを言って場を盛り上げようとしたり、グループの中で自分に与えられたキャラを演じてみる。本当の自分はその

ような人間ではないのだけれど、それを演じることで友だちとつながる。相手をがっかりさせないように、傷つけないように、間を持たせるように必死に自分を演じる。

本当の自分を人前で出すのが難しい。出したら恥ずかしいし、もし出してみんなにひかれたら嫌だから、絶対に出さない。だから、自分の心を欺いて、自分を演じ続ける。そのような自分にとっても疲れを感じていました。皆さんも、人前で、友だちの前で、家族の前で、先生の前で、バイトの店長の前で、バイト仲間の前で、先輩の前で、自分を演じていませんか。

皆さんと同じ、十代の終わりだった私は、先ほどの聖書の言葉と出会って、正直、ぐさりときました。まさに演じている自分が聖書にあるように、虚しかったからです。

では、自分の心を欺かないために、どうしたら良いのか。先ほどの聖書の箇所には「舌を制することができず」とあるように、舌を制御することです。「制する」と訳されている言葉は、もともとは馬にくつわをはめるという意味です。自分の本心とは別に、舌が好き勝手に話さないようにくつわをはめて抑制しろということです。そうすれば、自分の心を欺かずにすむということ。これは、簡単なようでとても難しいです。

かつての私のように、人前で自分を演じている方は今日の聖書からの問いかけに少し耳を傾けてほしいと思います。言いたくもないことを人前で言つて、その場だけの自分を演じ続け、自分の心を欺き続ける私たちは本当に幸せでしょうか。自分の心を欺かずに生きることこそが、幸せにつながるのではと聖書は私たちに問いかけているように思えます。

人を汚すもの

総合人文学科長 出村 みや子

マタイによる福音書 一五章一〜一一節

1 そのころ、ファリサイ派の人々と律法学者たちが、エルサレムからイエスのもとへ来て言った。2 「なぜ、あなたの弟子たちは、昔の人の言い伝えを破るのですか。彼らは食事の前に手を洗いません。」3 そこで、イエスはお答えになった。「なぜ、あなたたちも自分の言い伝えのために、神の掟を破っているのか。4 神は、『父と母を敬え』と言い、『父または母をのしる者は死刑に処せられるべきである』とも言っておられる。5 それなのに、あなたたちは言っている。『父または母に向かつて、『あなたに差し上げるべきものは、神への供え物にする』と言う者は、6 父を敬わなくてもよい』と。こうして、あなたたちは、自分の言い伝えのために神の言葉を無にしている。7 偽善者たちよ、イザヤは、あなたたちのことを見事に預言したものだ。8 『この民は口先ではわたしを敬うが、その心はわたしから遠く離れている。9 人間の戒めを教えとして教え、／むなしくわたしをあがめている。』10 それから、イエスは群衆を呼び寄せて言われ

た。「聞いて悟りなさい。口に入るものは人を汚さず、口から出て来るものが人を汚すのである。」

待降節（アドヴェント）に入り、礼拝堂にもクリスマスツリーが据えられてクリスマス行事の準備がすすめられています。朝晩寒くなりましたので、教室では風邪をひいている学生を見かけます。まずは食事や睡眠による日頃の健康管理と共に、これからの時期は特にうがいと手洗いを心がけてください。

皆さんはローマ観光で目にする「真実の口」と題する円形の彫刻を知っていますか。オードリー・ヘップバーン主演の映画「ローマの休日」で日本でもおなじみになったモニュメントです。映像やレプリカをどこかで見たことがあることと思います。この映画ではヨーロッパ各地を訪問旅行中の、オードリー演じる王女アンが、ひそかに城を抜け出してローマ市内に行き、偶然にアメリカの新聞記者ジョー・ブラッドレーと出会います。そしてアン王女が身分を隠してジョーと共にローマの休日を楽しむというラブロマンスですが、この中でジョーがこの「真実の口」に手を入れる場面は特に印象的です。これは海神オケアノスの顔が刻まれている円形の彫刻で、手を口に入れると、偽りの心がある者は、手を抜くときにその手首を切り落とされたり、手が抜けなくなるといふ怖い伝説があります。これに関連して、ある大阪の大学病

院ではこれからのインフルエンザの流行対策として、とてもユニークな試みをしているそうです。これは、現代ではこの映画の影響で、「真実の口」の彫刻を見ると思わず手を入れたくなるという心理を巧みに利用して、病院に来た人が手を彫刻の口に入れると、中で消毒液が手に噴射される仕組みになっていて、風邪やインフルエンザの予防に一役かっているそうです。

本日の聖書の箇所をご覧ください。ここでは一見したところ、手洗いが問題となっていない。場面はエルサレムからイエスのところに来たファリサイ派の人々と律法学者たちが、食事の前の手洗いを問題にして、イエスに対して「なぜ、あなたの弟子たちは、昔の人の言い伝えを守らないのか。弟子たちは食事の前に手を洗っていないではないか」とイエスに問いただすところから始まります。ただしここで問題になっているのは衛生面での手洗いのことではなく、食事の前に手を洗うというユダヤ人の宗教に関わる祭儀的習慣のことです。ここではわざわざ「エルサレムから来た」ユダヤ人たちとの論争であることが強調されているのは、こうしたユダヤ人の習慣や律法規定を厳格に守る宗教指導者たちが、律法から自由な福音を説くイエスに挑戦している場面だからです。なぜあなたの弟子たちは、昔の人の言い伝えに従って食事の前に手を洗うことをしないのですか、と。

これに対してイエスは鋭く反論しています。三節をご覧ください。「そこで、イエスはお答えになった。なぜあなたたちも自分の言い伝えのために、神の掟を破っているのか」と。議論

がやや複雑に見えますが、キーワードは三節と六節にでてくる「自分の言い伝え」という表現です。これらに注目して読むと、理解しやすいと思います。イエスは出エジプト記二〇章から、学生の皆さんもキリスト教学の授業で学んでご存じのモーセの十戒の第五の戒め「あなたの父母を敬え」を引用し、またこれに続く二一章一七節から「父または母をのしる者は死刑に処せられるべきである」との言葉を引用しています。イエスはここで、神の言葉としての律法と、昔からの言い伝えとして人々が守っているに過ぎない祭儀的習慣をはっきり区別しておられるのです。五節をご覧ください。「それなのに、あなたたちは言っている。『父または母に向かつて、「あなたに差し上げるべきものは、神への供え物にする」という者は、父を敬わなくてもよい』と」。イエスはこうした宗教指導者たちが言い伝えを巧みに操作して、結局は父母を敬えとの神の言葉をも無にしてしまう彼らの欺瞞的行為を痛烈に批判しておられるのです。イエスは彼らを「偽善者たちよ」と呼んで、次に預言者イザヤの言葉を引用しています。「この民は口先ではわたしを敬うが、その心はわたしから遠く離れている。人間の戒めを教えとして教え、むなしく私をあがめている」と。ここでイエスは人の心を問題にして、神が人間に与えた律法の精神に立ち返るようにと促しているのです。

それでは本日の聖書のメッセージはどこにあるのでしょうか。それは今日の聖書引用の最後にイエスが群衆に向けて語りかけられた言葉にあると思います。一一節をご覧ください。「口

に入るものは人を汚さず、口から出てくるものが人を汚すのである」とあります。この言葉も律法の解釈に関わっています。皆さんもご存じの通り、ユダヤ教徒やイスラムの人々は食物規定にこだわります。例えば豚肉とラードが含まれた食品を食べませんね。それは旧約聖書に記された不浄なものを食べることによって罪を犯すことを恐れるからです。キリスト教徒は食物規定に縛られず、健康の問題は別として何でも食べることができます。それは主イエス・キリストが、罪は食べ物によって生じるのではなく、「口から出てくるもの」すなわち、人が発する言葉によって生じることを教えたからです。こうした聖書解釈の違いを知っておくことは、国際社会に生きる私たちが、様々な宗教とそれに関わる習慣を知ることになりますので、とても大切です。福音書には他にも律法の解釈をめぐる当時のユダヤ教の宗教指導者たちとイエスの論争がありますので、ぜひ読んでみてください。

キリスト教は言葉を重視する宗教です。言葉を使うことは神が人間に与えた重要な能力です。人は言葉によって人を喜ばせることもできますが、人を悲しませ、怒らせ、人を陥れることもできるので。わたしたちは正しく言葉を使うことに努めているつもりでも、言わなくてもいいような余計なことを言ったり、悪意のあることを言ってしまう、後で後悔することも多いものです。主イエスがここで私たちに教えておられるように、自分の「口から出てくるもの」、自分が発した言葉を反省することによって、自分の内に内在する罪を自覚することはと

でも大切です。特に忙しい日々の中で現代はメールやSNS、ツイッター等が手軽なコミュニケーション手段となっていて、人間関係を損なうことのないように情報発信には注意したいものです。またこれとは反対に、大切な人への感謝や愛情は心の中で思っけても、それを言葉にしなければ意味がないことも多いものです。

これまでお世話になった方やなかなか会う機会のない友人にクリスマスカードや年賀状を書く予定の方もおられることと思います。どうぞ学生の皆さんには大学礼拝の時を通じて他者とのコミュニケーション力を養い、友人や家族、今後の皆さんが活躍する職場や国際社会において出会う大切な隣人との良好な関係を築いていって頂きたいと思ひます。

信仰より愛

文学部教授 鐸 木 道 剛

コリントの信徒への手紙一 一三章四〜七節、一三節

4 愛は忍耐強い。愛は情け深い。ねたまない。愛は自慢せず、高ぶらない。5 礼を失
せず、自分の利益を求めず、いらだたず、恨みを抱かない。6 不義を喜ばず、真実を喜
ぶ。7 すべてを忍び、すべてを信じ、すべてを望み、すべてに耐える。・・・13 それゆ
え、信仰と、希望と、愛、この三つは、いつまでも残る。その中でもっとも大いなるも
のは、愛である。

今年二〇一八年は珍しくNHKの大河ドラマを見ていました。『西郷どん』です。途中から
ですが、十月頃たまたまみて、主演の鈴木亮平という俳優さんの演技に感銘したので、それか
らずっと見ていました。史実の西郷隆盛については、私は無知なのですが、林真理子原作のそ
の大河ドラマでは西郷隆盛は常に弱い人に寄り添う人物として描かれていました。そして最初
は対立していた人たち（放送を見た十月以降では、徳川慶喜、島津久光、木戸孝允といった人

たち)も最後は西郷を信頼し、彼を支持するという具合でした。西郷の周りには善意 (bona voluntas) が満ち、それだけ西郷隆盛は私心ない、純粹な愛の人であったという描かれ方でした。そして西郷の好んだ言葉は「敬天愛人」です。

この言葉は放送の最終回にも取り上げられていましたが、この言葉は、「天」を「神」に替えて、わが押川方義先生が好んだ言葉「敬神愛人」と同じなのです。内村鑑三も『代表的日本人』の筆頭に挙げたのは西郷隆盛でした。そして内村鑑三はそこに陽明学の影響を見て取りまします。陽明学はキリスト教と似ていると高杉晋作が言ったといい、明治以降の日本人のキリスト教受容を準備したといわれます。陽明学とキリスト教の関係はどうなのでしょう。

かつてパウロはアテネのアレオパゴスで説教したときに、こう言いました。「あなたがたが知らずに拝んでいるもの、それを私はお知らせしましょう」(『使徒言行録』17:23)。実際アレオパゴスに立つと、目の前のアクロポリスの丘に、遠くにそびえる神聖な神殿、その神殿はあまりにも高貴なので足を踏み入れるのをためらうほど。実際、私は何度もアクロポリスに登りながら、何ユーロかで誰でも入れる神殿群のある頂上に一度も入ったことはありません。そして眼をアレオスパゴスから下に転じると、眼下のアゴラには中央にビザンティンの聖堂があります。しかしその小さくて貧弱なこと。ほとんど犬小屋です。ここでよくわかるのは、キリスト教がどれほど貧者のための宗教であったかということです。美的なものエリート少数

者のものです。キリスト教の救いは万人に開かれています。それが大前提です。それは旧約以来の神の前での平等の観念です。ですからエリート主義になりがちな耽美主義や神秘主義を否定するのがキリスト教です。現代の唯物論者のスラヴォイ・ジジェク（一九四九〜）が「キリスト教はマルクス主義と共闘して、新種の精神主義と闘わねばならない」（『脆弱なる絶対』）と言った通りです。パウロが伝えるのは、ユダヤの人々に啓示された唯一の神です。そしてその神は、ユダヤ人以外の人々が知らずに拜んでいる神であると言います。キリスト教はユダヤ教を成就するとは新約聖書にしばしば書かれています。他の宗教もこうしてキリスト教によって成就されるのです。おそらく陽明学についても同じでしょう。陽明学の言う「天」は実は「アブラハム、イサク、ヤコブの神」なのですといふでしょう。キリスト教のみが世界を意味付け、その根拠は七八七年の第二ニケーア公会議のいうように、ファンタジーではなく歴史的实际の事件である受肉であり、それを信仰するのがキリスト教であり、キリスト教以外に救いはない。私もそう思っています。そのことを、ペテロが手紙で「いつでも弁明できるように備えよ」といい（『ペテロの手紙1』3・15）、マルチン・ルターも「主張するのを好まない」エラスムスを批判して「キリスト者なら主張することを好まねばならない」（『奴隷的意志について』）と書き、言葉で説明できるようにせよとはいいますが、しかし聖書は信仰について、どう記しているでしょうか？

それで今日、選んだ聖書の箇所です。ここではなんと、信仰よりも愛が大きい（「大きい (μεγαλο)」の比較級の「より大きい (μεγιστο)」）と言うのです。信仰ではないのです。これは、どういうことでしょうか。

イエスは何度も弟子たちに、「わたしを信じるか」と言われ（マタイ16:15、マルコ8:29、ルカ9:18、ヨハネ9:35）、また「生きていてわたしを信じる者は、決して死ぬことがありません」（ヨハネ11:26）、また「信じるものには何でもできる」（マルコ9:23）とまでおっしゃっています。イエスを信じる信仰とは何でしょうか？ 眼の前のイエスが神であること、つまり四五一年のカルケドンの公会議で決定された教義によると、イエスは神であり、同時に人であるということです。

しかし、そもそも教義はなんのために形成されたのでしょうか？ 最初のイエスとの出会いを可能な限り理解するためではなかったでしょうか？ 最初のイエスとの出会いは、たくさんの群衆が集まって来たということですから、魅力的だったのでしょうか。イエスが復活したのち、弟子たちに現れたときの記述があります。エマオでの出会いです。イエスに出会ったと気付いた弟子たちが、そのとき「わたしたちの心は燃えていたではないか」（ルカ24:32）と回想します。イエスとの出会いは、心が燃えるような出会いなのです。それはパウロが『コリントの信徒への第一の手紙』十三章で、詳しく語っている愛の体験だったでしょう。その愛とは

何であるか。独占欲などを伴う、我々がすぐに思い付くような人間的な愛ではありません。パウロが伝えようとする愛は、「すべてを信じ、すべてを望む」愛です。すべてを信じる、つまりそれは特定の信仰ではないのです。

われわれ日本人は、すくなくともぼくの知っている人たちは、改めて尋ねられると、自分は無宗教と答えるでしょう。しかしみな何か大いなるものの存在を信じています。そうでなければ初詣にあれだけの数の人（七割以上といいます）がいくはずがありません。しかし初詣に行っても、その神社なりお寺がどういう神あるいは仏を祀っているのかには無関心です。何か大いなるものに祈る、それは人類に普遍の宗教性です。それをキリスト教は、世界中にあるすべての宗教性を成就するというのです。日本の宗教に対してもそうです。しかしこういう位置づけは、上から目線で傲慢に見えます。ここで思い起こすべきは、再び、教義すなわち信仰の出発点は、すべてを信じる愛の体験であることです。このことは教義史の大家、かのアドルフ・フォン・ハルナツク（一八五一—一九三〇年）が、プラトン主義との決別とともにくりかえし強調しているところです。真理であるイエスは、最も低い姿でこの世に生まれ（『フィリピの信徒への手紙』2:7-8）、さらに軽蔑され見捨てられました（『イザヤ書』53:3）。再びマルチン・ルターを引用しますと、「きみたちは思索を押し進めて、あまりに高く迷いすぎることなく、くだってキリストが横たわりたもう飼葉桶とむつきのところにいなさい」（『卓

上語録』FB257)。このことを忘れた伝道はありません。

思い悩むな

経営学部教授 松村尚彦

マタイによる福音書 六章二五節

だから言っておく。自分の命のことで何を食べようか何を飲もうかと、また自分の体
のことで何を着ようかと思ひ悩むな。命は食物よりも大切であり、体は衣服よりも大
切ではないか。

今日の聖書の箇所のテーマは「思い悩むな」ということです。しかし私たち人間は、日々の生活のなかで何かと思ひ悩むものです。

以前学生の皆さんと行っていた聖書の勉強会で、この箇所を読んだ時、それぞれの思い悩みを語り合うことがありました。参加した学生は皆さんクリスチャンだったのですが、やはり様々な思い悩みがありました。皆が一番不安を感じていたのは、将来のことです。将来就職できるのだろうか、就職した後やりがいをもって仕事ができるのだろうか、あるいは長い間仕事を続けられるのだろうかというようなことです。

またある学生は、こんな話をしてくれました。自分が今までで一番思い悩んだのは、大学進学の時だった。第一志望の学校に落ちて今の大学に来たのだが、その時は本当に辛く、自分の将来の夢が叶えられなくなるのではないかという怖さを感じ、一時は絶望的な気持ちになったそうです。しかし四年経った今になって振り返ってみると、沢山の友達も出来て、楽しい時を過ごすことができた。そして何よりも自分の知らない新しい世界が開いていくことが実感でき、とても充実した大学生活を送ることができた。だから今の大学に来ることができて良かった、と思えるようになったと言っています。

このように私たちは、まだ経験したことのない将来のことについて、不安を感じ、思い悩みます。そしてその不安を何とか解消しようとして、あちらこちらへ走り回ったりすることもあります。しかしそれはこれから始まろうとする大学生活や、就職した後の仕事について、よく知らないことが原因であることが多いのではないのでしょうか。

私たちはよく知らない、未知の世界に足を踏み入れるときに不安を感じます。しかし実際に経験して、そこを通ってみると、以外と心配していたことは起こらず、むしろ予想していたよりもプラスのことの方が多くて安心する、ということをししばしば体験します。だから将来について思い悩むよりも、将来が持っている可能性に期待し、それを信頼し続けることが大切だと思います。

イエスは、食べものので思い悩む古代の人々に、「空の鳥のたとえ話」を使って、そのことに気づかせようとしています。先程の聖書の箇所続きにはこうあります。

「空の鳥をよく見なさい。種も蒔かず、刈り入れもせず、倉に納めもしない。だがあなたがたの天の父は鳥を養ってくださる。」

つまり鳥は、食べ物の中で心配して、あれこれ走り回ったりしないのに、それでも自分と与えられた命を生きている。このように小さな鳥のためにさえ、神様は働いてくださるのだから、ましてやあなたがた人間に対しては必要なことは全て備えられているのだ。だから、その神様の働きに信頼して日々の生活を送りなさい、というのです。

この神様の働きを信頼して生きるという生き方は、現代の私たちにとっても意味のあることだと思えます。私たちがまだ経験したことのない未知の世界に対して不安を感じる時にも、そこには神様の働きを通して豊かな世界が待っている。神様に対してそのような信頼と期待を抱きながら生きていくことが、本当に大切なことだと思えます。

しかし、長い人生の中で、私たちは望む物が与えられず、幸福とは言えないような日々を過ごすこともあるでしょう。そのような失意のなかにあって、自分の望みを放棄せざるを得なく

なった時に、あるクリスチャンが残した美しい詩があります。最後にそれを皆さんに紹介したいと思います。

この詩は、約一四〇年前に、ニューヨーク州にある病院の一室に書き残されていたのですが、誰が書いたものかは分かりません。アメリカの南北戦争で負傷した戦士が、その人生の半ばに書いたものだとも言われていますが、名前が分かりませんので、ある「無名戦士の歌」と呼ばれています。ではお読みします。

大きな仕事をするために力を与えてほしいと求めたのに、

与えられたのは弱さだった。

神に従う謙虚さを学ぶために。

善きことを成し遂げるために健康を求めたのに

与えられたのは病弱な体だった。

何が善きことを学ぶために。

幸せになりたくて富を求めたのに

与えられたのは貧しさだった。

賢明であることを学ぶために。

世の中の称賛を得ようとして成功を求めたのに
与えられたのは挫折だった。

神の助けを必要とする者であることを学ぶために。

求めた物は何一つ与えられなかったが、

願いはすべて聞き届けられた

神の意に添わぬ者であったにもかかわらず

心の中で言い表せないものは全て叶えられた

私はあらゆる人の中で

最も豊かに祝福されていたのだ

聖書の神は、私たちの弱さのなかでこそ、豊かに働いてくださる神です。私もその神様に信

頼し続けることができる人生を送りたいと思います。

旅人をもてなす

法学部教授 横田尚昌

ローマの信徒への手紙 一二章九〜二二節

9 愛には偽りがあつてはなりません。悪を憎み、善から離れず、10 兄弟愛をもつて互いに愛し、尊敬をもつて互いに相手を優れた者と思いなさい。11 怠らず励み、靈に燃えて、主に仕えなさい。12 希望をもつて喜び、苦難を耐え忍び、たゆまず祈りなさい。13 聖なる者たちの貧しさを自分のものとして彼らを助け、旅人をもてなすよう努めなさい。14 あなたがたを迫害する者のために祝福を祈りなさい。祝福を祈るのであつて、呪つてはなりません。15 喜ぶ人と共に喜び、泣く人と共に泣きなさい。16 互いに思いを一つにし、高ぶらず、身分の低い人々と交わりなさい。自分を賢い者とうぬぼれてはなりません。17 だれに対しても悪に悪を返さず、すべての人の前で善を行うように心がけなさい。18 できれば、せめてあなたがたは、すべての人と平和に暮らしなさい。19 愛する人たち、自分で復讐せず、神の怒りに任せなさい。「復讐はわたしのすること、わたしが報復する」と主は言われる」と書いてあります。20 「あなたの敵が飢えていたら食

べさせ、^{かわ}渴いていたら飲ませよ。そうすれば、燃える炭火を彼の頭に積むことになる。」
21 ^{あく}悪に負けることなく、^{ぜん}善をもって悪に勝ちなさい。

いまお読みしました九節冒頭の「愛には偽りがあつてはなりません」というのは、一見すると偽りの愛を施してはならないといった神からの命令であるように聞こえます。しかし、パウロがここでローマの教会の人々に対して伝えたかったのは、そうではないのです。神の偽りのない愛を受け、主イエス・キリストによる救いにあずかっているあなたがたは、偽りのない愛に生きることができるので、という励みしだったのです。そして、「聖なる者たちの貧しさを自分のものとして彼らを助け、旅人をもてなすよう努めなさい」とされます。

ここに、「聖なる者たち」というのは、信仰が与えられ教会に連なる者たちのことをさします。また、「助ける」というのは、「分かち合う」とか「交わりを持つ」という意味だそうです。つまり、貧しさを共に分かち合おうではないか、ということでは、「貧しさを分かち合う」には、どうすればよいのでしょうか。

それが、「旅人をもてなすよう努めなさい」ということです。パウロの時代の旅というものは、今では考えようのない危険で、苦勞の連続でした。したがって、旅人というだけで、苦しみの中にある人、危機に直面している人を意味します。その旅人をもてなし、宿を貸し、彼ら

が疲れを癒され、体力を回復して旅を続けることができるようにすることは、その人の命に関わる、現実的なそして具体的な援助だったのです。それゆえ、その「もてなし」とは、今日言われているような「おもてなし」とは違って、その人が行き倒れずに生きて旅を続けることができるように祈り支えることなのです。

ところで、旅人をもてなすというのは、自分たちとは違う異質な人を受け入れ、交わりを持つ場面です。しかも、旅人は、素性の分からない人たちです。それでも、新たな人々を迎え入れなさい。そうして自分たちの交わりが常に新しくされ、変えられていく場合にのみ、私たちは偽りのない愛に生きることができ、真実の兄弟愛に生きる群れを築くことができるのだとパウロは説きます。

さらに、十四節以下では、「あなたがたを迫害する者を祝福しなさい。祝福しなさい、呪ってはならない」とされています。本来なら、呪ってやりたいような相手を祝福するなんてとんでもない、考えられないことです。それなのに、その相手を呪わず祝福しなくてはならない。それはなぜかと言えば、相手を呪い迫害すると、今度は相手から呪われ復讐される危険に晒されるからです。そこでは、さらなる呪いや復讐の連鎖を招いて共倒れになってしまいます。共倒れになるということは、お互いの優れた面、神から頂いた賜物を無にしてしまいかねません。のみならず、敵対することをやめて和解の道を選んでいけば、ひよっとすると敵対してい

た相手から助けられることもあるかもしれないし、自分のために働いてくれるようになるかもしれない。そうした可能性を全く閉ざしてしまうのです。かくして、呪いの思いからは何一つ喜ばしいこと、建設的なこと、明るく前向きなことは生まれません。呪いから祝福へと変えられることによって、まことの平安がもたらされ、平和に暮らせるようになります。

とはいえ、これを自分の問題としてひきなおしてみれば、やはり自分を迫害し危害を加える相手を、おいそれとは許せない思いをぬぐえないのが我々人間です。では、どうすればよいのでしょうか。その答えが、十三節の「聖なる者たちの貧しさを自分のものとして彼らを助け、旅人をもてなすよう努めなさい」ということです。相手を迫害したり危害を加えたりするのは、結局は相手のことを恐れていて受け入れる度量がない自分の心の弱さ、貧しさからくるものだといえましょう。でも、そうして迫害し排除し続けていると、自分の味方と思う相手も、いつかは自分を裏切って敵対者になるのではないかという疑心暗鬼に駆られてきます。真に友に信頼をおくことが出来ず、安住の地が得られなくなってしまうです。知らないうちに自分自身が排除されたところに佇むことになってしまい、心は流浪の旅人と化してしまふのです。しかもその旅は、心の平安、平和な暮らしからは程遠い、非常に孤独でみじめなものです。あたかも神からの復讐にあった、といわんばかりのみじめさです。

だからこそ、せめてあなた方はそのような迫害する相手の心の弱さ、貧しさを自分のことと

して受け止めて、流浪の旅人をもてなすように努めなさいとおっしゃるのです。お互い聖なる者たちだからです。また、そこに聖なる者たちの意義があるのです。

ぐつと言葉を飲み込むような思いで、相手を受け入れ、旅人をもてなすように努めたならば、必ずやいつか相手は心を開くはずで、そのとき、相手は自らの心の貧しさに気づき、迫害することの愚かさに気づいて、燃える炭火が頭に積まれるような思いになるのではないでしょう。

お祈りをいたします——

救われた者たちの祝宴

工学部准教授 長 島 慎 二

マルコによる福音書 二章一三節～一七節

13 イエスは、再び湖のほとりに出て行かれた。群衆が皆そばに集まって来たので、イエスは教えられた。14 そして通りがかりに、アルファイの子レビが収税所に座っているのを見かけて、「わたしに従いなさい」と言われた。彼は立ち上がってイエスに従った。

15 イエスがレビの家で食事の席に着いておられたときのことである。多くの徴税人や罪人もイエスや弟子たちと同席していた。実は大勢の人がいて、イエスに従っていたのである。16 ファリサイ派の律法学者は、イエスが罪人や徴税人と一緒に食事をされるのを見て、弟子たちに、「どうして彼は徴税人や罪人と一緒に食事をするのか」と言った。

17 イエスはこれを聞いて言われた。「医者が必要とするのは、丈夫な人ではなく病人である。わたしが来たのは、正しい人を招くためではなく、罪人を招くためである。」

本日与えられた福音書のみ言葉はマルコによる福音書二章十三節から十七節までです。イエ

ス様の公生涯の比較的初期、ガリラヤ湖北岸の町カファルナウムで伝道をなさったときの出来事が記されています。カファルナウムはローマの兵隊の駐屯地があった重要な町で、また、ローマ皇帝に収める税金を集めるための収税所があった町でした。本日読みました聖書の記事によれば、イエス様が湖のほとりに出て行かれ、集まって来た群衆に教えられたのです。そして通りがかりに、アルファイの子レビが収税所に座っているのを見かけて、「わたしに従いなさい」と言われました。レビは立ち上がってイエス様に従ったとあります。もとより、収税所に座っていたというのは、偶然ではなく、レビが徴税人であったことを意味しているのですし、また、同時に、レビは、ユダヤ人から嫌われていたであろうこと、罪人と思われていたであろうことを伺うことができます。嫌われていたというのは、単にレビが税吏であったからではなく、当時、異邦人に渡すための税金を集める係であったからで、多くの徴税人が不正を働いていたこともあります。ですから、聖書が「レビが収税所に座っているのを見かけて」とあるのは、イエス様が、レビの置かれた立場や心の渴望などを読み取られたことを意味しており、その上で、「わたしに従いなさい」と言われたのです。すなわち、それは、単に、ちよつと用があるから来てくれなやかというのではなくて、それまでの自分を脱ぎ捨てて救いの世界に向けて立ち上がるようにとの招きであったのです。はたして、レビは、イエス様の招きに応えて、立ち上がってイエス様に従ったのでした。

わたしたちは、周囲の人たちに、自分を正しい者であるように飾ることはできるのですが、自分自身に対してはできないものです。そうしたことが、わたしたち自身を追い詰めるのです。そうしたわたしたちの心の本質は、何か善行を積みめ打ち消すことができるのかと言え、それもできないのです。詰まるところ、わたしたちは、往々にして、レビのように、罪の中に埋没し、絶望し、立ち上がる事ができないではないでしょうか。そうしたところに、イエス様がおいでになるのです。聖書は、神の子イエス様の眼差しが、わたしたちに注がれていることを教えるのです。わたしは、きつと、収税所に座っていたレビは、イエス様のことを遠くから羨望の眼差しで見っていたのだと思います。そして、そうしたレビのことを、イエス様も見ておられたのに違いありません。ときは満ちて、イエス様はレビに声をかけ、レビは立ち上がったのです。そのときが、レビの救いの時、喜びのときであったのです。

本日の記事は、このあと、イエス様や弟子たちが、レビの家で食事の席に着いておられたときの出来事が続いています。そこには、レビ以外の多くの徴税人たちも同席しています。わたしには、それは救われた者たちの喜びの祝宴のように感じます。賑やかで、笑いに満ちた祝宴です。まるで、それは教会の交わりのようでもあります。ところが、それを見たファリサイ派の律法学者は、イエス様が罪人や徴税人と一緒に食事をされるのを見て、弟子たちに、「どうして彼は徴税人や罪人と一緒に食事をするのか」と言いました。彼らは、決して罪人とは付き

合わなかったからです。それに対して、イエス様は応えて言われました。「医者を必要とするのは、丈夫な人ではなく病人である。わたしが来たのは、正しい人を招くためではなく、罪人を招くためである。」と。有名なみ言葉です。これは、イエス様が、いまから罪人を悔い改めさせるとおっしゃっているではありません。「この通り、救われて喜んでいいではないか。どうして、そのことがわからないのか。また、なぜ、共に喜ばないのか」という意味なのだと思います。そうです。一方で、救いの喜びの祝宴をあげている者たちがいて、他方で、それを認めることができない、すなわち、罪の中に埋没している者がいるのです。ですから、イエス様のこの有名なみ言葉は、まさしく、ファリサイ派の律法学者に対して救いのみ言葉として語られたのです。はたして、このファリサイ派の律法学者は、このみ言葉を聞いてレビのように立ち上がったのでしょうか。今日、わたしたちも、このみ言葉を、わたしたちに語られた救いのみ言葉として聞きたいものだと思います。

人生を変える秘訣

教養学部准教授 大澤 史 伸

ルカによる福音書 一八章五節

自分は神など畏れないし、人を人とも思わない。しかし、あのやもめは、うるさくてかなわないから、彼女のために裁判をしてやろう。さもないと、ひっきりなしにやって来て、わたしをさんさんな目に逢わすにちがいない。

みなさん、こんにちには。私は教養学部地域構想学科の教員の大澤史伸といます。大学では、「社会福祉概論」や「福祉サービス論」などを教えています。どうぞよろしくお願いいたします。みなさんは、女優の有村架純を知っているでしょうか？ 有村架純は、一九九三年生まれの現在、二十五歳の人気女優です。彼女は、二〇一三年の連続テレビ小説『あまちゃん』でブレイクしました。二〇一五年には、主演映画『ヒリギヤル』で金髪ギャルに挑戦して話題となり、この映画で第三十九回日本アカデミー賞優秀主演女優賞および新人俳優賞、第五十八回ブルーリボン賞主演女優賞を受賞します。

二〇一六年には、第六十七回NHK紅白歌合戦の紅組司会者に起用され、二〇一七年には、連続テレビ小説『ひよっこ』（NHK）ヒロインに選ばれます。この時は、脚本家の強い要望もあり、オーディションを行わずに主演が決まっています。この年の第六十八回NHK紅白歌合戦の紅組司会者に起用され、自身にとっては二年連続での司会を務めました。

ここまで聞くと、有村架純は、なんてすごい人なんだろうと思ってしまうすよね。でも、実は、彼女は、二〇一〇年にデビューから約三年間一〇〇回以上ドラマやCMのオーディションに落ちまくっているのです。ブレイクのきっかけになった二〇一三年放送の『あまちゃん』でも、能年玲奈が演じたヒロイン役のオーディションを受けたものの落選。助演に回されていきます。

有村は、こう言っています。「夢がかなう一歩手前でスパンと切り捨てられた気持ち。ショックで、悔しくて、泣きました」と。でも、彼女はあきらめませんでした。そして、現在の人気女優の有村架純となったのです。今日の聖書にもあきらめないで自分の夢を叶えた女性の話が載っています。共に聖書を見ていきましょう。

ルカによる福音書一八章二節を見て下さい。「ある町に、神を畏れず人を人とも思わない裁判官がいた。」とあります。つまり、どういふことかというところ、この裁判官は、最悪な裁判官

だったということです。想像されることは、この裁判官は、原告のコネとわいろによって間違った判決をする人物であったということです。実際にこの当時のパレスチナではこのような裁判官もいたそうです。そうなると、コネとお金を持っていない人はまともな裁判をやつてもうえないということになります。

次に、三節「ところが、その町に一人のやもめがいて、裁判官のところに来ては、『相手を裁いて、わたしを守ってください』と言っていた。とあります。「やもめ」とは、夫をなくした女性、または、夫のない独身の女性を意味します。さらに、ここでは、「すべての貧しい者、弱い者の象徴であるともいえます。つまり、コネやわいろで動いてしまう裁判官のところ、コネやわいろを持っていない女性が来て、自分のためにきちんと裁判をして欲しいと希望するのです。事態は、最悪です。でも、このコネもお金もない女性は自分の願いを叶えるために次の三つのことを行うのです。

① 自分の持っているもので勝負をすること

みなさんがこの女性の立場だったら、何をするでしょうか？ ある人はコネを作る、あるいは、わいろを贈るために働いてお金を貯める場合もあるのではないのでしょうか？ よくこういう人が私のもとに訪ねてきます。自分の夢を叶えるために、まずは何年間か働いて準備をするという人です。でも、不思議とそのような人で夢を叶えたという人は私の経験上、ほとんどい

ません。

多くの場合が、途中で夢をあきらめてしまうのです。あるいは、状況が変わってしまったり、場合によっては、病気やケガなどのアクシデントによって計画を変更せざるを得なくなってしまうのです。常に状況は変化していることに気がつかなくてはなりません。この「やめ」の女性のように状況が必ずしも整っていなかったとしても、今、自分の持っているもので勝負をすることは大切なことであるといえます。

② 願いつけること

五節を見てください。『自分は神など畏れないし、人を人とも思わない。しかし、あのやめは、うるさくてかなわないから、彼女のために裁判をしてやろう。』とあります。四節では、「裁判官は、しばらくの間は取り合おうとしなかった。」とあります。最初、この裁判官はこの女性を無視していたことが分かります。無視をしていれば、そのうちに諦めるだろうと思っていたのです。しかし、この女性は決して諦めることなく、自分のためにきちんと裁判をして欲しいと願いつけるのです。

裁判官自身が言っているように、「神など畏れない、そして、人を人とも思わない。」そんな彼女が彼女の願いつけるという姿勢に負けて、「彼女のために裁判をしよう」と決断するので、願いつける時に門は開かれることを知らなくてはなりません。

③ 自らが行動を起こすこと

五節をよく見ると、『彼女のために裁判をしてやろう。さもないと、ひっきりなしにやって来て、わたしをさんざんな目に逢わずにちがいない。』とあります。「ひっきりなしにやって来る」とは、この女性自らが起こした積極的な行動だといえます。そして、次に、この不正な裁判官に「わたしをさんざんな目に逢わずにちがいない」と言わせるのです。「私の目の下を打つ」が直訳です。つまり、この裁判官は、この彼女の積極的な行動に対して、かなりのプレッシャーを感じた、ということなのです。

自分の人生を変え、願いを叶えるためには、自らが動いてチャンスをつかむことが大切であることが分かります。

最後にこんな話をして終わりたいと思います。今月十二日に米朝首脳会談が行われました。アメリカの大統領はみなさんも知っているとおり、トランプ大統領です。そのトランプ大統領が尊敬する人を知っているでしょうか？ 彼の名前はノーマンヴィンセント・ピール牧師という人です。トランプ大統領は、少年のころ、マーブル協同教会のピール牧師の言葉を吸収し、それ以来、この考え方を信じてきた、と言っています。

そのノーマンヴィンセント・ピールは『積極的考え方の力』という本を書いています。この

本は、世界四十一カ国で翻訳され、二、〇〇〇万部、六十年間読まれています。この本の中で、ピールは次のように言っています。

「世の中に、根氣ヰに勝るものはない。才能ヰがあっても、成功できない者はごろごろしている。天才ヰも報われないのが世の常だ。学歴ヰも賢さを伴うとは限らない。根氣ヰと信念ヰがあれば無敵だ。」

あなたのためにお祈りをしたいと思います。神様、私たちも自分の人生を変え、願いを叶えるために、今日の聖書の「やもめ」の女性のように、①自分の持っているもので勝負すること、②願いつけること、③自らが行動を起こすこと、をすることができるよう私たちに力を与えて下さい。イエス・キリストのお名前によってお祈りいたします。

アーメン!!

ろうあ者の父 高橋 潔

東北学院史資料センター 日 野 哲

マタイによる福音書 五章一三―一六節

13 あなたがたは地の塩である。だが、塩に塩気がなくなれば、その塩は何によつて塩味が付けられよう。もはや、何の役にも立たず、外に投げ捨てられ、人々に踏みつけられるだけである。14 あなたがたは世の光である。山の上にある町は、隠れることができない。15 また、ともし火をともして升の下に置く者はいない。燭台の上に置く。そうすれば、家の中のものすべてを照らすのである。16 そのように、あなたがたの光を人々の前に輝かしなさい。人々が、あなたがたの立派な行いを見て、あなたがたの天の父をあがめるようになるためである。

大阪に、大阪府立中央聴覚支援学校という公立学校があります。この学校は、耳が聞こえないために会話が出来ない子どもたちのための学校です。この学校に一九二〇年代から三〇年代にかけて、つまり今から約八十年から百年前になりますが、東北学院の卒業生が相次いで就職

し、十名もの卒業生が教師として在職していた時期もありました。仙台市内であれば、たとえば大手の銀行や企業、県庁や市役所などには十名どころか百名単位で本学の卒業生が就職していますので、十名はむしろ少ない数だと思えます。しかし、このような特別な学校、すなわち耳が聞こえない子どもたちの「ろう教育」をする学校に、しかも仙台から遠く離れた大阪にある学校に本学から次々と就職するなどということは、今ではどうてい考えられないことです。なぜこのようなことが起こったのか。それには高橋潔という卒業生の存在が大きく影響していました。

高橋潔は、今から百年以上前の一九一三年（大正二年）に東北学院を卒業した方ですが、在学中に礼拝を通してキリスト教に触れ、讚美歌の美しさ、それを歌う楽しさから宗教音楽を知って、声楽の勉強のためにフランス留学を志していましたが、経済的理由のために断念せざるを得ませんでした。実際、高橋が在学中に迎えた東北学院創立二十五周年記念の音楽会では、四名の学生による合唱が行われましたが、その一人は高橋、もう一人は先ほど歌った讚美歌「一二一番「まぶねの中に」の作曲者安部正義であったことが記録されています。

留学を断念し、傷ついた高橋の心を慰め励ましてくれたのが、当時東北学院院长であったシュネーダーでした。シュネーダーは次のように語りかけました、「ボーイは外国など行かな

い方がいい。外国へ行かないで日本で幸せの少ない人の為に尽くしなさい。」高橋は考えま
す、[〃]幸せの少ない人[〃]とはどんな人だろうか。若き日の高橋には、自分が最も愛し、最も美
しいと思う音楽、それを聴くこと、歌うこと、奏でることができない人々が浮かびました。今
まで自分の周囲には接することのなかった人、考えたこともなかった人たちが、自分の心の中
に大きな位置を占めるようになっていったのです。こうして高橋は、シュネーダーの言葉を胸
に、一生を音の世界から遮断された人の為に生きようと決意して、大阪盲聾^{もうあ}学校の教師になり
ました。当時は「盲聾」学校ですから、目が見えず、耳も聞こえず、話すこともできない、ヘ
レン・ケラーと同じ三重苦の子供たちの学校でした。当時の校長はやはり同窓生の佐藤亀太郎
という方でしたが、やがて学校は「盲学校」と「聾聾^{ろうあ}学校」とに分かれ、高橋は聾聾^{ろうあ}学校の第
六代目の校長となります。

聾聾^{ろうあ}教育には二通りの教育法がありました。一つは口話法といって、口から音を発して言葉
で話すよう教育する方法と、もう一つは手の指を使う手話法ですが、当時は国の方針で口話法
だけを使用するよう強く指導されていました。時には子供たちの手を椅子に縛り付けて、手話
ができないようにして口話法を押し付ける教育方法がとられることもあったようです。高橋
は、このような様子を見て、公立学校でありながらこの国の方針に逆らって、生徒の能力に応

じた「適性教育」、つまり口話法が相応しい子どもには口話法を、手話法が効果的な子どもには手話法をとという教育方法を採用して、周りの学校の教職員や国の役人から非難や攻撃を受けながら、子どもたち一人一人に一番ふさわしいやり方で教育することをやめませんでした。また、高橋は他の学校が聴覚障害のある教師を退職させていく中、逆にこのような教師を採用していきました。そして、母校である東北学院からも志のある卒業生を次々と採用していったのです。

その一人に大曾根源助という卒業生がいます。後に高橋に続いて第七代目の校長になる方ですが、高橋はこの大曾根を欧米の聾啞教育の視察のためにアメリカに留学させました。まさにこの留学中に大曾根はヘレン・ケラーの自宅を訪ねているのです。一九二九年（昭和四年）十一月七日のことでした。大曾根は、別れ際にヘレン・ケラーから「参考に」と渡されたアルファベット式の指文字をもらって帰国し、勤務していた大阪市立聾啞学校で改良に改良を重ねて、日本式の指文字を完成させました。これが、現在でも手話に使用されている指文字で、「大曾根式指文字」と言われています。

これが縁となって、ヘレン・ケラーは八年後の一九三七年の初来日の際に本学を訪れ、現在の大学土樋キャンパスの本館前で講演しました。七月一日のことで、翌日の河北新報にも大き

く報道されました。

校長である高橋にとって、在学中の子供たちのことばかりではなく、それにも増して気がかりだったのは卒業後のことでした。ことあるごとに、「よろしくお願いいたします」と連発していたと、高橋の娘である川渕依子さんが伝記に書いておられます。ある時、思いがけない多数の募集がダイヤモンド研磨会社からありました。普通ならこちらからお願いに行くところ、この会社は初めから耳の聞こえないろう者にさせるための仕事を準備していたのです。集団での採用は夢のような喜びでしたが、ろう者の初めての集団生活には、現場での技術指導の他に、一緒に生活し、相談相手にもなれる人物が必要でした。高橋は、この大役を誰に頼もうかと喜びの中にも頭を悩ませていました。考え抜いた結果、自分の東北学院の後輩であり、自分の思いを察してくれるであろう人物として、加藤という教師を思いつきました。伝記には、高橋が奥さんと会話していた様子が次のように記されています。

「ダイヤモンドの件、加藤くんにお願ひしたよ」

「それは良かったですね。でも、加藤先生、よくお引き受けになりましたね。説得大変だったでしょう。」

「いいや、よくわかっていてくれたよ。それにしても、恩給を棒に振ってくれたのだから。」

感謝しなくては、忘れてはいけない。」

恩給とは、今の年金に当たるもので、公立学校のような公務員は一定の年数（当時は十七年だったようですが）を勤務すると自動的に支給されることになっていたので、本人はもとより家族にとっても退職後の生活に欠かせないものでした。「戦前の話で、恩給を棒に振るなんていう言葉はわからなかったが、両親がしんみりと話し合っていたことが心から離れなかった」と依子さんは記しています。

高橋潔は、戦後の一九五二年（昭和二十七年）に学校を退職し、一九五八年に亡くなりますが、依子さんはある時、この恩給を棒に振って転職した加藤大策先生にお会いし、父が本当に喜んで、感謝していたと改めてお礼を言いました。その時、加藤先生は、次のように言ったそうです。

「校長がそんなに。僕は何とも思っていないかったですよ。ただ、校長が行ってくれと頭を下げられたことをむしろ恐縮していました。そうして『はい、まいります』と、ただそう言っただけです。」

そして、伝記には次のように記されています。

「こともなげに、さらりとおっしゃった。そうして、遠い昔を懐かしむように、『それが大阪

市立聾学校なのです。僕だけじゃない。みんなそうですよ。』私は、父はなんて幸せな人だろうと思ったことだった。」

今日、ご紹介した高橋潔、大曾根源助、加藤大策などの卒業生は、今日の聖書の箇所で言われている「地の塩」「世の光」として生きた方々であろうと思います。私は、加藤大策先生が最後に言われた言葉、「それが大阪市立聾学校なのです。僕だけじゃない。みんなそうですよ」という言葉を東北学院に置き換えてみたいと思います。

「それが私の母校・東北学院なのです。僕だけじゃない。みんなそうですよ。」
私も卒業生の一人として、皆さんとそう言える人生をご一緒に歩みたいと願っています。

ある日の音楽礼拝

大学オルガニスト 今井奈緒子

二〇一八年六月二十五日(月) 土樋ラーハウザー記念礼拝堂 司会 野村 信 宗教部長

〔前 奏〕 J. G. ヴァルター (c. 1684-1748) トッカータ ト調

〔讃美歌〕 79

〔聖 書〕 マタイによる福音書 第五章一〜五節

〔オルガン演奏〕 J. P. スウェーリンク (c. 1561-1622)

ヘクサコード・ファンタジア

〔主の祈り〕

〔頌 栄〕 544

〔後 奏〕 S. シャイト (c. 1587-1654) 六声のベネディカームス

讃美歌第七九番は十六世紀末のオランダ発祥の讃美歌です。当時近隣のスペインやポルトガルなどと勢力争いの絶えなかったオランダが、スペインの支配から解放されたときに歌われたとされる、作者不詳の民謡に基づく歌です。一六二六年のネーデルラント歌曲集に収められて

います。日本でも、爽やかな朝の礼拝で、創造主を讃える賛美歌として親しまれてきました。

この賛美歌が生まれる少し前、ネーデルラントの巨匠スウェーリンクが没しています。宗教改革を経て、ロマン・カトリックから改革派へと改宗したアムステルダム市。当時教会の、礼拝の中のオルガン使用は制限されていたものの、スウェーリンクの紡ぐ即興演奏は市の名物となりました。改革派教会では現在でも、カルヴァンの制定した詩編歌を斉唱する伝統を守っています。一方でオルガンは賛美を支え導く楽器として大きな成長を遂げ、オランダをオルガン大国の一つにのし上げました。スウェーリンクの鍵盤楽器のための作品は、優れた対位法と変奏技法に特徴があります。「ヘクサ」はギリシャ語の hex 「6」、「コード」は同じくギリシャ語の choirde 「弦」に由来することばで、つまりド・レ・ミ・ファ・ソ・ラの六つの音でできた古い時代の音列を意味し、この曲では「ファ」の音で始まるヘクサコードが、まるで糸を紡ぐがごとく展開します。(ファII)へ音の上に作られるのは、柔らかいヘクサコードとと呼ばれ、なるほど穏やかで落ち着いた響きを奏でます。

スウェーリンクはまた、ドイツ・プロテスタントの諸都市から派遣された多くのオルガニストを教え育てました。前奏のシャイデマン、後奏のシャイト達です。彼らは故郷へ帰り、ドイツのオルガン文化を花開かせることになるのです。

二〇二八年七月四日(水)

多賀城礼拝堂

司会

木村

純一 大学宗教主任

七月二十三日(月)

泉礼拝堂

司会

川島

堅一 大学宗教主任

〔前

奏〕

J・クーナウ (一六六〇—一七七二)

「ダヴィデとゴリアトの闘い」より

・ 自信満々のゴリアト

・ 恐怖に怯えるイスラエルの民と、彼等の神への祈り

〔讚美歌〕

(多賀城・泉) 380

〔聖書〕

(多賀城・泉) 旧約聖書サムエル記上 第七章四一〜五一節

〔演奏〕

クーナウ 聖書ソナタ「ダヴィデとゴリアトの闘い」より

・ ダヴィデの勇氣と敵を倒す決意、神の救いを信じる

・ 宣戦布告と闘い

・ ゴリアトめがけて石を投げたっ！

・ 倒れ伏すゴリアト

・ 逃げるペリシテ軍と追いかけるイスラエル軍

・ 歓声を上げて勝利を喜ぶイスラエルの人々

・ ダヴィデの名譽を讃える女たちによる音楽

〔主の祈り〕

〔頌 栄〕 (多賀城・泉) 545B

〔後 奏〕 クーナウ 聖書ソナタ「ダヴィデとゴリアトの闘い」より

・人々は喜び、盛大に歌い踊る

旧約聖書に記された物語は、どれも大変興味深いものばかりです。一旦紐解いてみると、先生のお話もそっちのけで読みふけてしまうこともしばしば?! 中でもサムエル記上巻に登場する「ダヴィデとゴリアトの闘い」は、ダヴィデ王の若き日の武勇伝として、よく知られています。今日はこの物語を、十七〜十八世紀ドイツの作曲家クーナウが、鍵盤楽器で演奏する音楽に仕立てたものを、前奏と、説教に代わっての演奏、そして後奏とに分けて、お聞きいただきます。

イスラエルとその王サウルは、隣国との戦いに明け暮れ、とりわけペリシテ軍の擁するゴリアトという巨人の威力に、苦しめられていました。その頃ダヴィデは、八人兄弟の末っ子で年若き少年、普段はペリシテ軍と戦う父と兄たちの使いつ走りをしていました。そのダヴィデ少年が持ち前の勇気と機転で、ゴリアトを見事に倒す話なのです。興味のある人はどうぞ、今日お読みいただいた旧約聖書サムエル記上第一七章の冒頭に戻って、物語を黙読しながら演奏を聞いてください。

作曲者のヨハン・クーナウ（一六六〇—一七七二）はライブツィヒ聖トマス教会で音楽監督

を務めました。この役職はやがて、かのバッハ（ヨハン・ゼバスティアン）に引き継がれます。クーナウが旧約聖書に題材を取って作曲した《聖書ソナタ》は、原題を《いくつかの聖書物語の音楽表象》といい、「ダヴィデとゴリアト」の他に「ダヴィデの音楽によって癒されたサウル」「ヤコブの結婚」「瀕死のヒゼキア王の回復」「イスラエルを救ったギデオン」「ヤコブの死と埋葬」の計六作品があります。いずれも聖書を読み進めていくと、それらの物語に出会うことができますよ！

二〇一八年十一月二十七日(火)

多賀城礼拝堂

司会

木村

純二 大学宗教主任

十二月三日(月)

土樋ラーハウザー記念礼拝堂

司会

野村

信 宗教部長

〔前

奏〕

F.クープラン（二六六八―一七三三）

「修道院のミサ」よりグロリア

・ 第一節（地には善意の人に平和あれ）

・ クロモルヌのフーガ 第二節（主を讃え）

・ ティエルスによるデュオ 第三節（主をあがめ）

〔讚美歌〕

（多賀城）

164

（土 樋）

95

〔聖 書〕

（多賀城）

エフェソの信徒への手紙

第一章一〇～一四節

(土 樋) ルカによる福音書 第一章六七〜七五節

〔オルガン演奏〕 クープラン「修道院のミサ」より

- ・トランペットのバス 第四節(神なる王、天の王、全能の父なる神よ)
- ・クロモルヌをテノールで 第五節(神なる主、神の小羊、父の御子よ)
- ・コルネとティエルスによるディアログ 第八節(主のみいと高し、イエス・キリストよ)

〔主の祈り〕

〔讚美歌〕 (多賀城) 541

(土 樋) 540

〔後 奏〕 クープラン「修道院のミサ」より

- ・グラン・ジュによるディアログ 最終節(父なる神の栄光のうち
に、アーメン)

今日の音楽礼拝は、今年生誕三五〇年を記念するフランス古典の作曲家、フランソワ・クー
プランのオルガン作品を紹介します。クープラン一族は王室にも仕えた音楽家の家系で、中
でもフランソワは多数のクラヴサン(チェンバロ)作品と、「教区」と「修道院」のための一連
のオルガン・ミサ曲により、傑出した存在でした。パリのサン・ジェルヴェ教会オルガニスト

として活躍し、その作風は伝えられる性格を反映し、高貴でストイックです。

オルガン・ミサ曲というのは、カトリックの礼拝で必ず歌われる「通常文」と呼ばれる賛歌（聖歌）のことばを節で区切り、曲がつけられて、ミサの中で司祭や聖歌隊と交互に演奏されたものです。今日はグローリア（栄光の賛歌）の部分のオルガン曲九曲のうち七曲を、前奏、聖書朗読のあとの演奏、後奏に分けて演奏します。

来週から教会は、アドベント Advent といって、キリストの降誕を待ち望む暦を刻んでいきます。グローリアは、クリスマスに天使の告げる「いと高きところでは神に栄光があるように。地の上ではみこころにかなう人々に平和があるように。」という高らかな呼びかけから始まるのです。

クープランは、フランスのオルガンの独特な音色に、例えばトランペットには神の威厳、クモルヌにはイエス・キリスト、ジュ・ドウ・テイエルスというストップの組み合わせには聖霊、というような象徴を託して用いたと言われています。

音楽礼拝 二〇一八（平成三十）年十一月十四日（水）

宗教音楽研究所特任准教授

中川 郁太郎

司 式：藤原佐和子（大学宗教学主任）

奏 楽：渡辺 真理（礼拝オルガニスト）

独 唱：中川郁太郎（宗教音楽研究所特任准教授）

〔前 奏〕

〔讚 美 歌〕 19

〔聖 書〕 コヘレトの言葉 第三章一節～二一節

〔独唱と賛美〕 ジョン・L・ベルとグラハム・モールの作詞・作曲による アイオナ共同

体賛美歌集」より二曲。

《望み消える時、心よ、歌え》

1. 望み消える時、心よ、歌え。

悲しみいやされ、歩みだすため。

2. 病にある時、心よ、歌え。

喜びの歌で 痛みやわらぐ。

3. 造り主に今、心よ、歌え。

深い憐れみに すべてをゆだね。

4. 夜の闇の中 心よ、歌え。

光があふれる 明日を信じ。

《もし時間が充分にあったなら》

1. もし時間が充分にあったなら、この生命あなたに捧げるでしょう。

けれども今はそれが出来ないのです、わが主よ。

2. もし時間が溢れるほどあれば 愛の調べあなたに歌うでしょう。

けれども今はそれが出来ないのです、わが主よ。

3. 「出来るはずだよ」主はそう言われた。「時はすべて私のものだから、

あなたは自由、だから愛に生きなさい。わが子よ。」

4. すべてをかけて従います、主よ、弱い私を助けてください。

主の御心が私の思いとなるまで、わが主よ。

「主の祈り」

「頌 栄」

541

【曲目解説】

一九六〇年代、スコットランドでは新しい賛美歌の作詞・作曲が非常に盛んにおこなわれるようになり、この現象は「ヒム・エクスプロージョン（賛美歌の爆発）」と呼ばれました。この運動をきっかけに、イギリス・アメリカなど英語圏を中心として多くの新しい賛美歌が生み出されました。

「アイオナ共同体賛美歌集」もそれらのうちの一つで、スコットランド西部のアイオナ島にある修道院跡で、年ごとに三週間ほどの共同生活を送る超教派の「アイオナ共同体」の生活の中から生み出された賛美歌です。詞と曲はジョン・ベル牧師とグラハム・モール氏を中心に作られますが、一曲ごとにメンバー同士が相談し合い、より良いものとなるそうです。本日はこの賛美歌集から二曲をご紹介します。

一曲目は身体の痛みや心の苦しみの中で賛美することの意味を歌う《望み消える時、心よ、歌え》、そして二曲目は、現在の私たちの価値観の重要な部分を占める「時間」について歌った《もし時間が充分にあったなら》です。この歌は皆さんと一緒に歌ってみたいと思います。

life.” Eternal life means living with our Creator forever. God wants all this for us. However, as our Bible passage for today explains, if we are to receive what God wants to give us, we need to ask God for it.

Have you received what God wants to give you? Have you accepted the gift of unending life that God offers to those who ask God for it? *You* can have this life, a life filled with God’s love and peace; but you can only receive it from God. You can have this life that never ends; yes, *you* can have this *eternal* life. However, you can only receive this gift of eternal life if you ask God for it. I pray that each of you here today will open your heart to God and receive the love God wants to give you.

that God does for us.

It is good, of course, that *people* do good things for us even when *we* do not ask, and it is good when we do good things for others, even when they have not asked us to do them. We learn from today's Bible passage, however, that there are some things for which we *need* to ask. There are many things we should not give to someone unless that person asks for them. For example, a friend may give you a beautiful, large desk; but if you already have a desk and your apartment is small, you probably will not want to receive the desk your friend wants to give to you. You probably would like people to give you things like that only if you ask for them.

There are many things we should not try to force people to receive. Furthermore, there are many things that we can receive only if we ask for them. For example, if you are having trouble understanding the subject material in one of your courses, you can ask your teacher or another student for help. If you do not ask, you will probably not get the help you need.

There are some things that God, too, only gives us when we ask God for them. God has promised to give us much for our lives. However, we cannot receive many of these things from God unless we ask God for them. Like a loving parent, God wants to give us many things that show God's love for us. God wants to fellowship with us. God wants us to enjoy lives of peace. God wants us to enjoy God and God's creation. God wants us to enjoy a life that does not end, in other words, "eternal

difficult subject. You studied hard for the test. However, you did not do well on the test. After the test, you may have thought to yourself, “If only I had asked somebody to help me study for the test, I know I would have done better.” Shy people often have a difficult time asking other people to help them. This is sad, because all of us can benefit from the help others can give. If we don’t ask someone to help us, however, often that person does not know we need help.

All of us have received things for which we did not ask. For example, I think of the many meals my mother prepared for me when I was growing up. When I was a child, I did not ask my mother every day to make a meal for me. She just did it. Nor did I ever ask my father to go to work and earn money for the clothes I had to wear and the things I had to do. He just did it. We should all be very thankful for the many good things we have received from our parents and others, even when we did not ask for them.

God, too, gives us many things every day—things for which we do not even have to ask. Through God’s creative work, God has given us our world and our existence. Furthermore, through God’s continuing care of God’s creation, God provides our world with rain and sunshine so that we can have food to eat; and God does this for us, even when we do not ask God for it. Daily, God gives us air to breathe, even if we do not ask for it. Actually, a worship service like this one gives us a good opportunity to praise and thank God for these continuing acts of love and grace

Asking

大学名誉教授 David Murchie

(マーチー・デイビッド)

SCRIPTURE READING : Matthew 7:7-12 “Ask, and you will receive; seek, and you will find; knock, and the door will be opened to you. For everyone who asks, will receive, and anyone who seeks will find, and the door will be opened to him who knocks. Would any of you who are fathers give your son a stone when he asks for bread? Or would you give him a snake when he asks for a fish? As bad as you are, you know how to give good things to your children. How much more, then, will your Father in heaven give good things to those who ask him! Do for others what you want them to do for you: this is the meaning of the Law of Moses and of the teachings of the prophets.

How many times have you said to yourself, “I wish that I had asked?” Or, “If I had asked, I think the result would have been different.” There are so many times when we would have done a job better if only we had asked someone to help us. In other words, we failed to do the job well because we didn’t ask anyone to help us. For example, maybe you took a test on a

編集後記

大学宗教授主任 阿久戸 義 愛

「大学礼拝説教集」第二十三号をお届け致します。東北学院大学では、授業が開講される日はいつでも、毎日必ず礼拝が守られています（通常の礼拝のほかにも、英語礼拝や音楽礼拝など、様々なスタイルの礼拝が行われています）。ここに収められている説教は、二〇一八年度に実際に語られた説教を一部改編して文章化したものです。この説教集を通して、東北学院の大学礼拝のよい雰囲気を感じていただければ幸いです。

東北学院の「生活」の中心には礼拝があります。それはすなわち大学礼拝の中心である「説教」が、東北学院の中心にあると言い換えてもいいでしょう。説教を通して、礼拝に集まる学生と教職員一人ひとりがキリスト教精神と生活の問題を考え、祈りのなかに自分の生活を振り返り、日々の学びや仕事へと送り出されていきます。説教は、礼拝のなかだけで終わるのではなく、そこから東北学院につらなるすべての人々の生活が形成されていくべき出発点です。説教がそのような大学における中心的位置を占めるようになるには、キリスト教の授業を通して学生のキリスト教に関する理解を深め、説教の内容について学生自身が自らと結びつけ

て考えられるようになる教育と訓練も必要でしょう。一方で、説教者の側も、パウロがロマ書（1・12）で「あなたがたのところで、あなたがたとわたしが互いに持っている信仰によって、励まし合いたいです」と述べたように、説教を聞く学生や教職員がどのような御言葉を求めているか耳を傾け、互いに学び、励まし合うことで、説教の言葉、福音の言葉は時代にふさわしく練り上げられていくものだと思います。このようにして、説教は、カール・バルトが言うように、生きた神の言葉となっていきます。

説教の課題、礼拝での御言葉の取りつぎは、牧師であろうと信徒であろうと、人間にとって決して容易なことではありません。しかし、聖書のテキストに真摯に向き合い、説教の課題へと取り組む私たちの奉仕を神が祝しお用いくださることをひたすらに祈りつつ、これからもこの奉仕に全力を尽くして参りたいと思います。この私たちの「チャレンジ」を、祈りにおぼえていただければ幸いです。

最後に多忙な研究や教育の毎日の中から時間をとって礼拝の担当をし、またこのように説教集の原稿を寄せてくださった教職員の方々に感謝をしたいと思います。

二〇一九年正月 『カール・バルト説教選』しかし勇気を出しなさい 待降・降誕・受難・復活』（日本キリスト教団出版局、佐藤司郎〔編・解説〕）を読みながら

大学礼拝説教集

第二十三号

二〇一九年三月三十一日発行

発行責任者 宗教部長 野村 信

編集責任者 大学宗教主任 阿久戸義愛

印刷・製本 株式会社 阿部紙工

問い合わせ先 東北学院大学 総務課

〒980-8511 仙台市青葉区土樋一―三―一

☎〇二二・二六四・六四二八

